
第貳百四拾號

女鑑第貳百四拾號

目錄

定價
一册 金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

明治三十四年十一月四日印刷
明治三十四年十一月五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 川崎直衛
東京市京橋區南八丁堀一丁目十二番地
印刷人 並木瓦雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社
東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地
發賣元 靜思館
(電話本局一千三百七番)

小松宮殿下御題辭
北白川宮妃殿下御序文
正五位勳三等足立寛氏述
日本赤十字社藏版

育兒談

製本クロース洋裝全一册
正價壹册代金貳拾五錢
郵稅四錢●郵劵代用一割增

本書緒言に曰く『此册子は日本赤十字社篤志看護婦人會幹事長殿下始め貴夫人令孃の予に小兒教育の方法を質されたるに因り本會正科講義の後に於て毎會其大要を一二箇條づゝ談話したる者を書集めたるなり云々』『此に於て淨書せしめ殿下に呈進するに及で復た之を上梓して普く世の婦女子に頒つべきの令命を蒙むれり是を以て遂に活版に上ぼすに方て更に傍訓を施せり是れ一般婦女子をして讀み且つ解し易からんが爲なり云々』と

取次販賣所

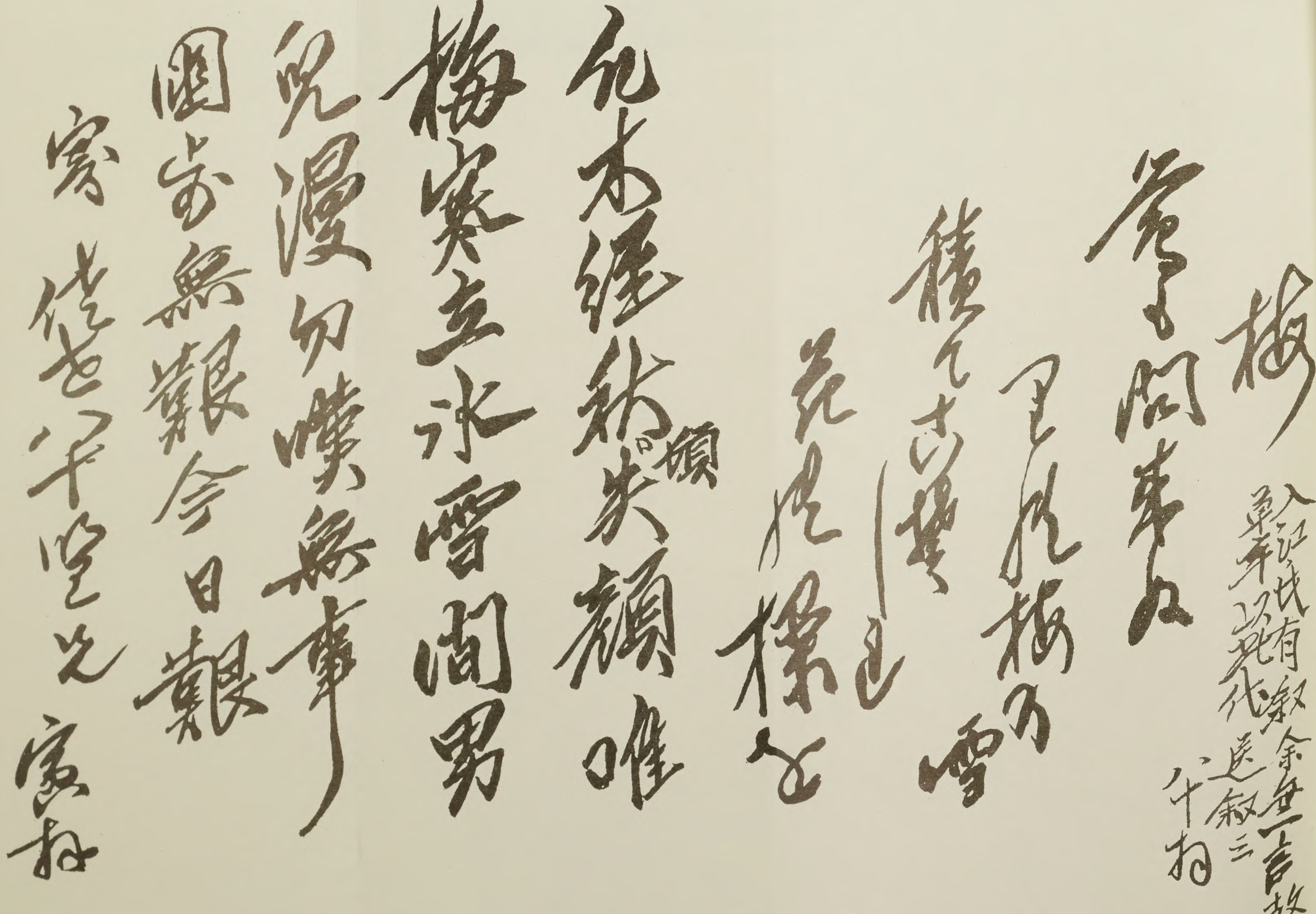
東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地
日本赤十字發行所
電話本局千三百七番

時計は堅牢最新形實用装飾兼備を撰ぶ
美術品は意匠卓絶製作精妙なり



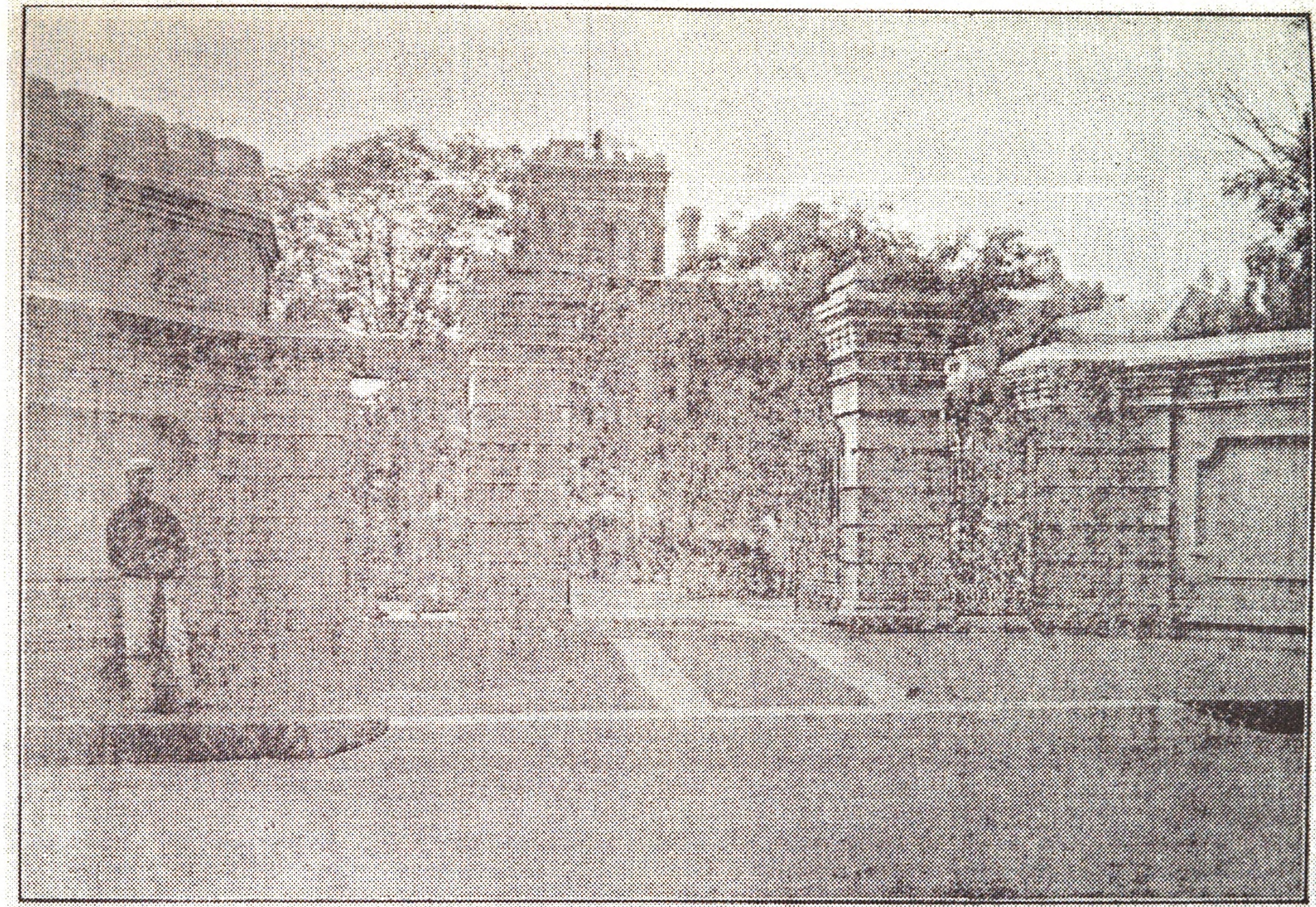
東京市日本橋區通二丁目　吉沼又右衛門本店
大阪市南區心齋橋筋順慶町角　吉沼出張

従來商品は階上にのみ陳列せしが今般
階下も亦陳列場となし總て最廉の正價
を附して顧客随意御覧撰擇の便に供す


梅
八十翁
枯木経秋尖顔唯
梅寒立氷雪間男
児漫切嘆無事
園當無報今日報
寄
家翁



前天津駐在帝國領事鄭永昌氏及夫人濱子刀自肖像

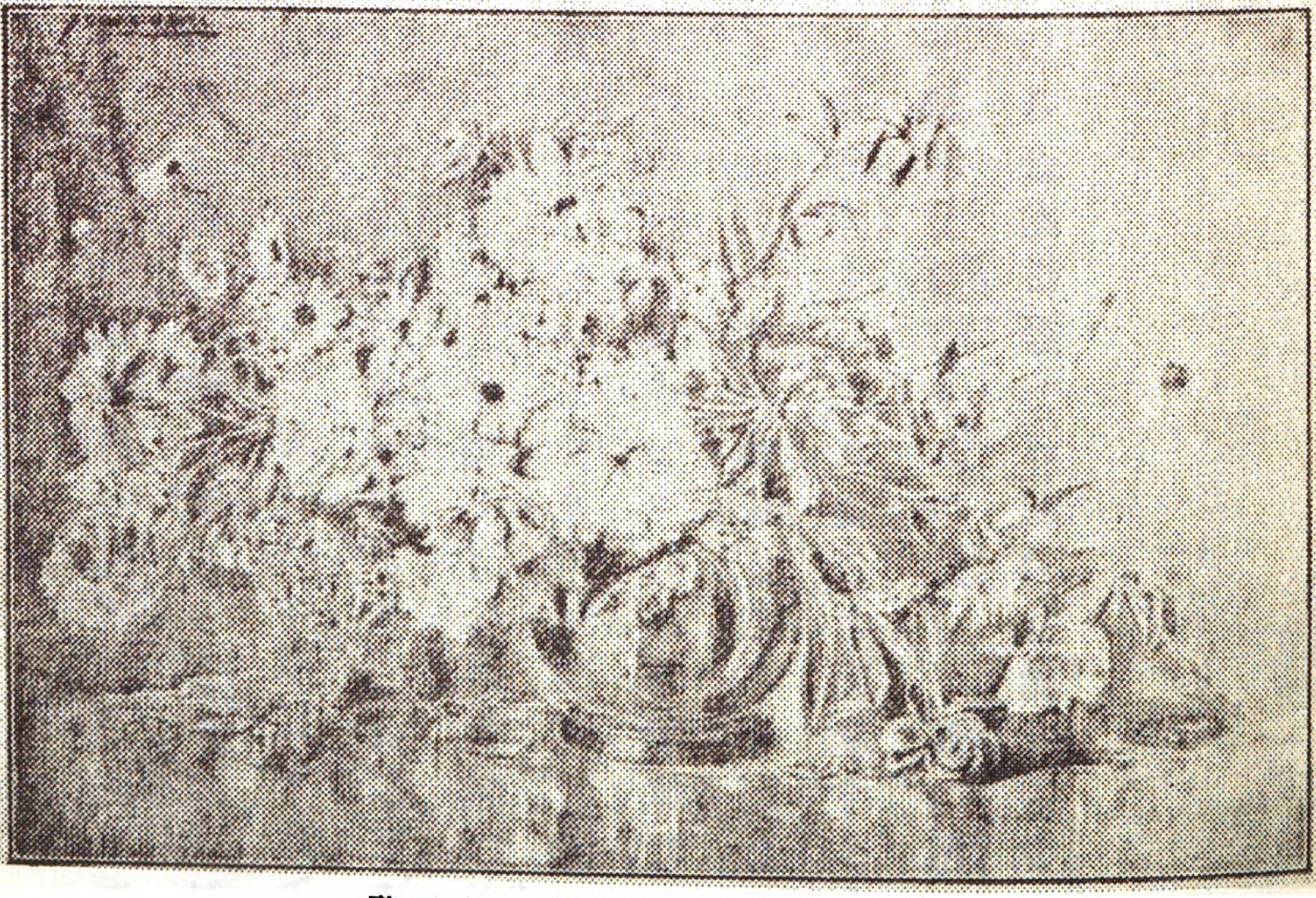


在清國天津日本領事館表門の圖

華族女學校生徒の鉛筆画



高等中學第壹級生前田せつ子謹



高等中學第壹級生關よし子謹

女學校に一言を勸む

去年の夏頃よりありけむ、或新聞にて、唱へられたる公德問題は、あはれ立消えの姿となりぬ。當時は、はしなくも、大に人心を動かし、新聞雜誌は更なり、人の交らふ際の話柄ともなり、殆ど社會の輿論ともいひつべき勢にて、吾等固より、之に對して、同意をあらはし、希望を屬したりき。さるは、いかに亂れつる公德も、こたび改革を加へなば、まこと道德ある國民たらむ事を期したればなり。されど、其の結果いかに、この刺戟によりて、公私道德のけじめ、輕重を悟りて之を實行せし者あるをきかず。即ち、形に表はれたる上に於ては、毫も以前と異ることなし。然らば、之を說きし者の方法の拙なるによるか、聞きて之を行はざる者のあしきか、未だ機運の熟せざりしに由る乎、そは兎まれ、この一事を以て、失敗に終りたりと速斷すべからず。世の中の事は、すべて、急激に變ずるは稀なり。相當の順序と、年代とを經て、初めて、變る者にて、人爲的の道德に至りては、殊に然りとす。そは、習慣に支配せられて、容易に、其の範圍を脫却する

事能はざるが故なり。畢竟、公德問題は、よし實行こそせられざれ、人心をいたく刺戟して、その反省を促したるや事實なり。若し、公德の實行されたらむには、盖し其の動機なりといふも、誣言にあらじ。公德の破れし原因、實に多かれど、まづは、拜金主義、利已主義などの行はれしに、負ふ所大ならむ。古來、吾國にては、私德と公德並行せしが、歐州文明の入りしより、百般の事物を悉く模放せしかば、尊歐學者のために、遂に、この主義を唱へられ、全く、今日の有樣となりしならむ。されば、此の主義を排し、公德の心を養はむには、第一學校教育に任せざるべからず。學校教育の責たるや、品性を陶治して、專ら、公德心を養成するを主とすればなり。また、之と同時に、各自、わが心に自覺するを要す。若し然らずんば、たとへ、禮法正しかるも、唯形式となり、社界の秩序は立たざるべし。故に、吾々は、學校にすゝむるに、學術よりも、寧ろ完全なる禮法を教授し、被教育者をして、自覺せしめ、之を實行せしむる事に傾心せらるゝをこれ公德心を修むるに、最も適當なる捷路と信ずる也。

論説

良慣習を養ふべし

伯爵 土方久元

良き慣習は、努めて養ふべし、又、惡しき慣習は、可成悛めざるべからずとは、何人も、日常口にする所なるも、之を躬に行ひ、實效を擧ぐることは甚だ難し。故に、次代の國民を薫陶する世の教育家たるものは、深く、此に留意せずんばあるべからず。方今、各學校にて授くる學術技藝の如き、完備せることは頗る完備し來れりといへども、學校の教授と社會の實情とは、自ら、其の趣を異にすることあれば、學生たるものは、學科講究の外、日常處世上の事に就きても、亦注意を怠るべからず。顧ふに、從來の風俗慣習の中には、善きもあり、惡しきもありて、玉石相混ず。然れども、年所を經る久しき時は、習遂に性となり、正しからざる慣習も、左程惡しと思はず、浸潤層積して、以って一鄕の弊害となり、果ては、一國の躰面をも傷くることあるを思はゞ、各人、慣習の重せざるべからざるは、多言を要せずして知るべし。又、識者は、習慣の良否を明かに甄別し得れども、一般世人は否らず。而して、幸に之を識別し得るものといへども、斷然として陋を除き、眞を保ち得るものは、極めて罕なり。故に、予は、進歩の基たる教育家に向ひ、特に率先して、矯風彰善の實を擧げんことを望まざるを得ず。尙、此に注意すべきは、久しく同種の風俗習癖の裡に養はれ、之に慣れたるものゝ、容易に其の弊竇を發見し、

匡救し難きことと是れなり。かゝる場合には、性來生活敎育等を異にせるものと相照し、我が天禀國風に應じて、取捨斟酌を行ひ、採長補鈌以て品位を保ち、國益を進むるを以て、處世の第一義と爲さゞるべからざることゝ思はる。茲に、予が實驗せる一奇談を記して、同志の人に示さん。

一昨年の夏、予は、東久世伯其の他二三の人と、濃州に游びたる事ありしが、偶、同じ車室中に、一外國婦人の乘り居るを見受けたり。軈がて、時刻の移るに從ひ、退屈に堪えずやありけん。當日、同車せる我が婦人の如きは、例の如く笑ひさゞめき、喰ひ散らし、人の手前をも憚らず、得手勝手ある振舞を爲せるが中に、獨り、彼の外國婦人のみは、動かず、哂はず、又飲みもせず、食ひもせず、端然として書見を爲せる間に、唯、時々窓外の風色を眺むるのみ。而して、最も奇なるは、食時に至るも、敢て飲食せざる一事ありき。當時、我邦に游歷中なる英人デオシイ氏は、此の日、偶々予等と同車せるを以つて、一行不審に堪えず、氏を介して、其の婦人に問ふ所ありしに、該婦人は、神戸に用事ありて、同日新橋より乘車せるものゝ由にて、米國人なりと云ふ。而して、該婦人は、何故に、食時に及ぶも飲食せざるやと質せば、氏は、從容として、如恁は、歐米婦人間に於て、敢て珍らしからぬ常習なりと應へぬ。且つ、語次、氏より泰西婦人の旅行、又は、集會中に於ける風習容儀の一班を聞くに及び、頓に以上の疑團を釋くことを得たり。氏曰く、歐米の婦人は、一般に公德を重ずるの念厚く、稠人廣座の間にて便ずることを甚敷忌憚するが故に、同婦人の如きも、亦、之を禁ぜんが爲め、羈旅中、故らに飲食を絶てるものあらんと。之を聞きたる予等一行は、皆、

孰れも憮然として一語なかりき。

此の時、予は、目の當り内外婦人の擧措を視、二者の品藻威儀、殆ど雲泥の差あることに驚き、偶然、彼我國人の性癖慣習等にまで聯想して、種々自覺する所も尠からざりしが、何事に因らず、慣習の力は、實に怖るべきものなり。人は、決して性來邪惡放佚なるものにあらず。唯、長して惡習に染まり、邪溪に陷り、一旦良心の痲痺せるものは、之を改悛するの難きが爲め、刑禁に觸れ、甚だしき者は、終に身命を失ふに至る。國家の道徳的問題は、之を分解すれば、一として國民各自の風氣慣習の淑慝に歸着せざるものなし。心ある者、豈に、大に省みる所なかるべけんや。殊に、身を教育界に置ける女子の如きは、教導の地位に在るものは勿論、縱令、教を受くるものと雖も、一般婦人社會に對しては、孰れも木鐸たるべき義務を有するものなれば、學術研究の外、亦、日常處世上の事にも注意を分ち、將來雄偉秀麗なる國民の慈母たらんことを期せざるべからず。近年、内外人交際の頻繁なるに從ひ、彼我慣習風儀の異同を親しく比較するを得て、幸なる次第なるが、かゝる時代には、國氏の風俗典禮上、種々變化を生ずることも多きものなれば、予は、同憂の士に向ひ、特に、其の採擇取捨を愼まんことを切望するものなり。

女子の學問　國語科(二)

岸田松二郎

文章は、有形の思想ともいふべきものにして、吾人が、心中に包藏せる種々の感情思想を發表して、永く之を衆人に示すべきもの、之を措て將た何

くにか求めん。古來詩に吟じ、歌に詠じ、或は書に寄せ、畫に托して、己が思想を表出せしもの甚だ多しと雖も、詩歌に表はすべきものは、其の妙處に存し、書畫に托すべきものは、更に絶妙ならざれば、以て其の眞意を描出し盡すを得ず。されば、通常の技能を以て之を論ずるときは、則ち、文章なるものは、吾人の依て以て、思想を表出すべき好適の具と云はざるべからず。

文章の要既に此の如しとすれば、之が技能を練磨すること、亦肝要の事に屬す。蓋、我國の普通文体には、自から二種の別ありて、女子の學ぶ所は、多く往復文に重きを置くが如し。世間唱ふる所は曰く、女子は、書簡文を能くすれば足れり。記事論說の文章を書くの時あらず。女子の本務は、自から、家内の細事にあるが故に、書簡の往復に澁滯なく、筆を把らば、立ろに用務の概要を記述し得るの能あらば足れりと。夫既に、世間の期待すること如此なるを以て、女子自身も、亦、此の技に重きを置くの傾あるより、往復の書信は敢て意とせざるも、祝詞祝文の類、若くは、己の意思を述ぶべき複雜ある思想の表出に至りては、頗る僻しと思ふもの多きが如し。試に、女學校に就學せる間に、作成せし文章の數を比較し視よ、果して往復文に其の數多きか、將又、記事文体に其の數多きか、余は、未だ之を統計の上より觀察したるにあらずと雖ども、常に、好惡に發する所より之を見れば、自から其の何れに傾けるかを卜するに足るべし。

惟ふに、此の種の好惡を異にする所以のものは、何ぞと問はゞ、往復文あるもの丶多くは、殆ど同一軌なる形体にして、其の內容も亦單純なるものあれども、苟くも、記事といひ論說といはゞ、形

体同一軌のものと雖ども、其の内容は比較的多數にして、之を排列するも、亦自から其の秩序を正しふ、首尾一貫して、歸結全からざるべからず。是に於てか、文中包む所に抑揚あり、頓挫あり、伏線あり、双關あり、形容あらざるべからず。文格の詮議既に此の如くあるを以て、短片小句のものは能くすべきも、趣味あり、秩序ありて、文理明晰なるものに至ては、勢、之を懶しとせざるを得ざるべし。例へば、雜談諧謔は、何人も能くする所あれども、懸河の快辯を揮ひて、人を口舌の上に翻弄し、或は、旗鼓堂々として一言の瑾なく、論じ去り辨じ來りて首尾完結せる辨をなさんは、其の術に熟するにあらざるよりは、之を能くすべくもあらず。文章も亦猶此の如し。均しく文字を排べ、章句を列ぬるものありと雖ども、其の巧妙なるに至りては、字々皆生動し、句々悉く活氣ありて、能く人の感情を動かし、之を以て邪を閉づべく、之を以て善を勸むるを得べし。文章の巧拙によりて、他人の感情を左右するに、多少輕重の差あること、以上の如くあるを視れば、均しく往復文體といふと雖ども、自己の眞意の全豹を表出せんとするには、其の字句の排列に長じ、思想の整理に熟せざるべからず。抑、之をなさんとするは、往復文其の物に重きをおくにあらずして、常に、記事論說の體に熟し、多々益之を整理して、連關其の宜しきを得るの能を養はざるべからず。既に此等の文章に習熟する時は、往復文あるものは、務めずして其の意を達するを得べし。而して、文章を能くせんとするには、啻に、文法文格に拘泥せんよりは、屢々之を練習するの勝れるに如かず。如何なる技術と雖ども、之を廢すること數月あらば、其の技其の術自から澁滯して、

意の如くなる能はず。されば、一たび學窓を離るゝの後と雖ども、常に意をこゝに留めて、物に感じ、折に觸るゝ毎に、之を文字に發することを務めて、懈らざる時は、益其の技に熟し、其の能を成して、旣修の歲月を徒費するを免るに庶からん。然るに、余輩の聞く所によれば、嘗て、學校にありし間は、文章を作るの趣味ありしと雖ども、一たび筆を投じたりしより、復た之を用ふるの必要少きがため、年と共に退步して、書簡の往復も、亦、遂に懶しと思ふに至れりといふもの多しと。果して如斯ありとせば、大なる恨事と謂はざるを得ず。女子が他家に嫁ぎ、殊に、遠隔の地に往くに當りてや、先づ、父母の口を衝て出づるものは何ぞや、他なし、彼地に往かば、必ず屢々書信の往復を務めよと。惟ふに、父母の心を忖度せば、朝夕最愛の子女に離れたる後は、其の心を慰籍すべきものは、子女自身が認めたる書信に若くものなけん。子女自身も亦、父母の膝下を離れ、四面他鄕の山河を眺め、暮靄遠くより來りて、晚鴉塒に歸るの時、郵便脚夫の來りて、父母より發せる消息を致さば、蓋、懷鄕の心萬斛なるべし。況んや封緘を解き、徐々として讀下するに當り、濃厚なる父母の親情、紙面に溢るゝあらば、之を見て、斷腸の思ひ幾何なるを知らざるをや。父母も、亦子女より致せる書信を見て、面々相對するの思ひあるは、旣に明かなるを以て、能く其の誠意を紙面に躍如たらしむるの能は、洵に、文章の能事と謂はざるを得ず。是、只一例を擧ぐるに過ぎず。更に之を細說すれば、其の例甚だ乏からず。誠意餘りありて文章の至らざるがため、或は、人の感情を損ひ、或は、人の嫌疑を招き、或は、一家親族の務めを曠ふせるもの其の例少とせず。抑、此

等の利害を思ひ、實際の事に臨みて、其の用を全ふせんがために、父母は、其の用を節して、女子敎育の務をなし、國家は其の資を投じて、敎育の機關を設けたるものなるを思はゞ、反省數番、以て其の本旨を全ふせんことを思ふは、被敎育者の義務と謂ふも、敢て過言にあらずと信ず。

精華

日本女訓（未定章）

川崎重陽

二十六、一たび嫁ぎたる上は、たとひ、夫の家、福すくなく、又、如何なる不幸に遭ふとも、これ、天より與へられたる境界なりと知りて、艱難をしのび、一向に、夫を助けて、家を榮えしめんことをつとむべし。しかせんには、天も人も、その誠に感じて、家、おのづから、幸多きに至るべきなり。

二十七、夫を敬ふ心は、須臾もゆるやかせなるべからず。夫婦の間は、親しきものなるが故に、心に、たゆみあらば、おのづから、氣儘に流れて、種々の禍、これより生ぜん。されば、つねに、言語をつゝしみ、禮儀を正しくすべきはいふも更なり、己が身の不行屆より、夫の恥となるが如きことなからんやうに心がくべし。

二十八、一家の主婦となりては、その務の多かる中にも、終始、己が一身を一家和樂の本源たらしめむこと肝要なり。およそ、家内は主婦一人の心のもちかたによりて、うらゝかなる春の日の如くにもなり、また、秋の夕の淋しげなるさ

まの如くにもなるものと知るべし。

二十九、家内の事には、何くれと、心を配りて、手おちなくし、夫をして、内顧の憂なからしめんことをつとむべし。夫は、常に、外の事に、心を艱まして、氣分のつかるゝこと多きものなれば、そのほどを、おもひはかりて、顏色をやはらげ、心をつくして、慰めはげまし、おのづから、疲勞を忘れ、氣色もあらたまりて、ふたゝび、煩雜の用務にも堪ふるを得らるゝやうにはかるべし。これ、内助の務の大なるものなり。

三十、妻たる職分を全うせむには、常に、順の字を守ること肝要なり。夫のことばには、よく〳〵、やはらぎ從ひて、逆らふことなかるべし。もし、わが心に、いかゞと思はるゝふしありとも、さしせまらざる事は、決して、即座に、理非をあらそふが如きことあるべからず、折を見はからひて、しづかに、己が思ふさまを語り出でゝ、敎を乞ふべし。もとより、人の妻たるものは、夫の譽を、我が譽とし、夫の喜を、我が喜とすべきものなるに、われ、獨、かしこげにふるまひたりとて、何にかせん。かへりて、恥づべきことなり。

清水上野介の妻

指原乙子

世の中騷がしかりし、元龜天正の頃とかや。相摸國守北條氏政の家臣に、清水上野介正令と呼べる勇士ありけり。その妻は、心操いとさがしく、召仕ふ者どもにもなさけふかく、且つ、力さへいと強かりしかど、萬つゝましく、内端にふるまひければ、そが力量を知る人もなかりしに、或時、山

上の御社にまふでんとせしに、山路の中途に、大きやかなる牛の俵二つつけたるが、後足二つを崖よりふみおとし、俵の縄は岩角にかゝりて、からくとゞまれるに、荷縄を切ほどかば、牛は谷そこへ陥るべし。さりとて引あげむすべもなければ、牛ひきは、途方にくれ、牛はうちうめきて居たりしかば、見るに忍びず、傍の人をはらひ、徐に、乗物より立出で、たゞひとり、牛のかたはらに至り、荷をつけながら牛を抱き、かろ〴〵ともちて道のなかばに引き立てしかば、見る人目を驚かさぬはなく、たゞ人にてはあらじ、神わざにもやとたゝへたりとぞ。

かゝる母の性をうけて、そが子太郎左衛門も、武勇に秀で、大力の名高く、度々の戰塲に、いつも功名を顯はせしかば、いつしか傲りの心長じ、人を侮り輕しめければ、母は、甚く之を憂ひて、太郎左衛門を戒しむるやう、先陣に進み、自ら敵を撃つとは、これ匹夫の勇なり。大將の器にあらず。楚の項王は、ちから大木を根ぬきにし、空とぶ雁をも睨みおとせしが、烏江の戰に敗れて、命を喪ひ、張良は、その姿女の如くなりしかど、謀を帷幕のうちにめぐらし、功を千里の外にたつ。されば、一方の大將たらんもの、たのむ所は力ならじ。良將は、威ありて猛からず、勢をもて人をあなどらず、義をまもりて禮うや〳〵しく、人をあはれみ、恩を施し、主君にまことの忠ありて、慾すくなく、色に惑はず、軍法武略を鍛煉して、敵をなびかししたがふるこそ、良將とはいふなるに、今、汝、人を侮り、我儘にふるまひなば、禍、必家に及び、父君の御いさほしをもあだにやなさんと、泪と共に諫めしかば、太郎左衛門もいたく耻ぢいり、之よりかたく身をつゝしみ、川狩、鷹狩

の遊を止め、ひたすら軍書をひもどき、軍法を學びしかば、智謀武略の勇士となりて、一世に重んぜられけるとぞ。かばかり力すぐれし女にて、道理にさとく、慈愛ふかく、その子の血氣の勇をおさへて、智を明にし、義を重んずる方に導きしは、實に、比類まれなる行にこそ。

今太平の大御世に、女の武勇は用なきに似たれども、近くは、北京籠城の如き、何時、如何なる事變の起らむもはかるべからず。内に雄々しき勇氣ありて、外に、柔しく貞順なる上野介の妻の如きは、實に、したはしき行になむ。

かよ女

藤丸きん子

大方は、生育いやしきものと聞かば、一筋にはしたなめたまふめれど、なかなかにうるはしき心もて、玉の臺の人も、及びがたき行爲をなすもの少からず。いでや、そのひとりを記して、諸孃の參考にまで供へまつらむ。

かよ女は、越中國新川郡窪村の百姓、彦兵衞といふ者の養娘なり。うまれつき孝心あつく、おさなき心にも、人の感賞すべき事のみいと多かり。かつて、養父は、病の床にふされけるが、晝夜の看護おこたりなく、よろづ至らぬことなかりしに、その年の秋に、はかなく桐の一葉と散り失せぬ。されば、たゞひとりの養母をかしづき、近きわたりに借宅して、墓をゝさめ、且は人に雇はれなどして、賴少くゝらしけり。

かくて翌年の夏、洪水いたく氾濫して、田畑人畜のきらひなく、災害を蒙るもの夥しかりしかば、生活の道もたへ、この家をさゝふべき便も盡きて、

同じ村なる養母の兄、小右衛門のもとにうつろひぬ。養母は四十五歳にて、おいくちし身にもあらねど、日頃、多病にして、世をわたる業もなしがたく、また、小左衛門も、貧しきが上に、水の禍にさへかゝりて、こを助くべき力もなければ、かよ女は、いと面なき事とは想ふものから、他にせんすべもあらざれば、日毎に養母の手をひきて、心苦しくも近隣の人々に食をこひ、いさゝかづゝの施しをうけて、やうやくこれを養ひ、常に、おのが身のいたましきさまは、つゆさら知らせざりき。

なほ、養母のこのめる食事の類を求めて、喜ばせんにはと思へど、その料に乏しかりければ、ひそかに、おのが黒髪を切りて、人に賣りあたへ、その代をもて、くさ〴〵のものを買ひいでゝ、進めしことも屢なりしとなん。かれこれのこと遠近にきこえ、あつぱれ孝心なる者よ、いかで助けでおくべきかはとて、物をめぐむもの益集ひきにけるが、遂に、領主の耳に入り、寛政元年、扶持米をぞ賜はりけるとぞ。

あはれ、孝は百行の本にして、人々のなべて行ふべきものなり。上下貴賤のけぢめによりて、そのさまこそ異れ、心をつくすに於ては一なり。さるを、かしこに生れば、かの代にあはゞなどいふ人あれども、そはいみじき僻ことなり。かく孝は、境遇によりて行否を決すべきにあらずして、尤も手近きところにあり。貴ときに生れし人は、親に孝をなすにさまで苦心なきなり。賤しき人は、さま〴〵ある事情のために、苦心すること多きぞかし。かよ女のごときは、それ等の苦さをなしても、親、而も養父母の安からむことを願へり。その心の美はしさ、ゆかしさ、感ずるに餘ありといふべし。

されば、さる苦心なくして、孝を盡し得るものは勿論、いかなる事情ありとも、行はざるべらざるは孝の道なりけり。

家政

禮節談片（承前）

石井泰次郎

禮節とは、貞丈翁が其の雜記にかゝれた如く、貴き人をばつゝしみ敬ひ、賤しき人をばあなどらず、同じ位の人をば、人を先たてゝ、我はへりくだるを禮と云ふなり。敬ふまじき人を敬ふは、へつらひなり。いやしむまじき人をば、いやしむるは奢なり。へつらひもなく、奢もなく、其の身の位相

應にして、過たる事もなく、及ばざる事もなく、よきほどなるを節といふなりとの、明文にはかならないのである。

さて、其の禮と節との二つが、正直にとゝのつて居らないのが、近世より初まつて、今に及ばして在る、小笠原流其の物でござる。又、正直にとゝのつて居る物は、上古より一統に傳はつて來て、時勢の變遷にも、其の主眼點を違へないで、ずつと行はれて居る、日本禮節と名稱を下すべき、禁中禮節、臣下禮節の差別のついて、自然に教授法も立て居る所の故實禮節である。まことに、此の故實禮節と名稱して、教授すべき禮節以外には、世の中に禮節といふ肝要な道のために、正直にたつて居る物は無い。

まづ、この正直な禮節の程度を、學術的に研究してほしいのである。風俗改良會も、何々矯正會も

弘道會も、教育會も、この正直な禮節の程度を、學術的に研究しない限りは、其の主要とする會旨を、明らかに顯揚する事は、出來得ないと思はる る。

正直な禮節の程度如何は、文學上に志ざせる者の能く解せねばならぬ事實で、此の正直の禮節の程度を記臆せざるほどは、文學博士も、理學博士も、法學博士も、醫學博士も、其の道々の博士の稱號も、名實相合はざる者と斷言します。これは、其の道々についても、此の正直な禮節の程度を、知らなければならないわけが有るからである。其のわけを約言していへば、即ち、君と臣との禮節の大義を、明らかにするために立て居るのが、此の正直な禮節の程度でござる。このやうに、むずかしく云ふては、聞えぬ人もあらうから、やさしい例からわけて行て、故實禮節を採用して、小笠原禮式を破棄すべき理由を説明してみやう。

禮と節とは、このやうなものである。源平盛衰記によつていはんに、小松の大臣が、中宮の御方へ申さるべき事が有つて、參られた時、仁壽殿に候はれて、師典侍殿と申す女房と、暫し對座せられてあつた。所が、師典侍殿の左の袴のすそより、大きな蛇が這ひ出て、重盛の右の膝の下へ這入つた。そこで、大臣が思ふたには、我さわいで立ならば、中宮も御騷きがある、師典侍殿も驚き給はんとて、左の手にて蛇の頭を押へ、右の手にて尾を押へて、六位參れと召した。

こゝが、即ち、君と臣との、禮と節がとゝのつて居た例である。重盛が蛇の押へざまも、又、起座をしなかつたのも、此の書の文章にもよるからであらうが、實に禮ばかりでなく、ほどよしといふ節にかなつて居る。つぎに、左の如く

書てある。

伊豆守、其時は、未だ藏人所に候ひけるが、指出でたりけるに、是は何と仰せられたれば、見候とて、つとよりて、布衣の袖を打ち覆ひて、罷り出で丶、御倉町の前に出で、人や候ふ、參れと呼びければ、小舍人參りたり。これ賜ていづくにも捨よ、とて差出したれば、一目見て赤面して逃げかへりぬ。郎等、省に賜りたれば、恐れず蛇の頭を取て、大路に出で、打振ふて捨てたれは、蛇即ち死にけり。

是、上位に對する下位の、禮と節とを明らに示したり。又、郎等、省が、大路に出で捨てたる即ち、君臣の禮節をみださずて、主人より受けたるを、遠く大路に持行きて、捨てしにて、主君に對する家來の禮と節とを示したり。

又、この次には、下位の人に對する、上位の人の禮節をあやまらざりし證を示したり。其文は

翌日に、小松殿自筆にて御文あり。昨日の御振舞、還城樂と見奉り候き。異體に候と雖ども、一匹一振送り進せしめ候、とぞ有りける。黒き馬の七寸に餘て、太く逞しきに、白覆輪の鞍置きて、厚房の鞦をかけたり。大刀は、長伏輪ありけるを、錦の袋に入れられたり。

是、貞丈翁がいはれたる、いやしき人をばあなどらずの本意にかなつて居る。其の進じたる物品の心入れも、深く思はれることである。此の次の文をよめば、貴き人をは、つ丶しみうやまひといふ本意にかなひて、最めでたい詞がある

仲綱、御返事には、御劔御馬謹んで拜領、御芳志之至、殊に畏まり入り候。去ぬる夜、誠に還城樂の心地仕り候。仲綱頓首謹言、と書きたりけり。

かくのごとくである。伊豆守は、源三位賴政が子息仲綱である。これ藏人所に候ふ身を以て、

大臣に對するの禮節をよくまもつたのである。この仲綱の禮節の正しかつたのは、即ち、源三位が家庭のよろしかりしため、のみならず、當時の武家禮節の、正直に行はれて居た故であらう。

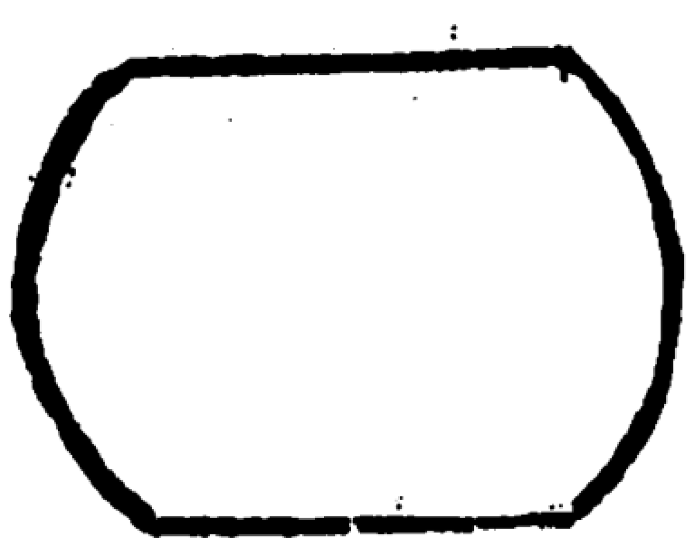
（つゞく）

木の葉慈姑

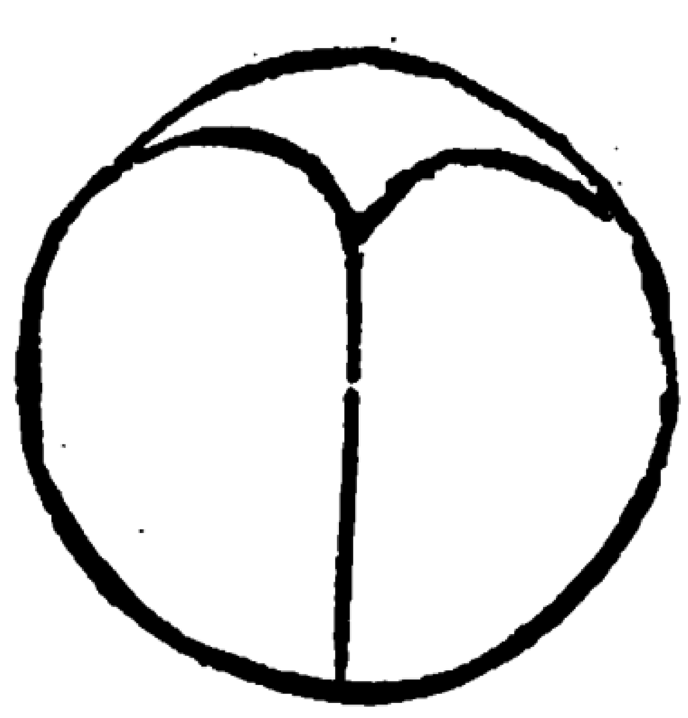
入口さめ子

慈姑の切樣は、梅櫻など色々あれど、そは、皆、知り給ふ所あれば、切り安くして、鳥渡、珍しき木の葉慈姑の切形を左にしめさん。

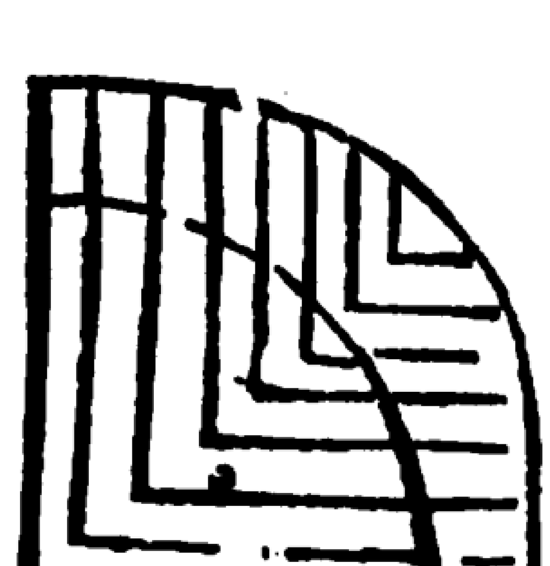
先づ、慈姑のかはを見事にむき去り、上下たゞしく、第一圖の如く切取り、後、第二圖の如く、横の丸き所を二ヶ所切りおとし、その切りたる一角を板に置き、第三圖の樣に、一分位の厚さに、一方より庖丁の先を板に附け、庖丁のもとを、少しくあげる心持にて、先の方丈板にあて、圖のごとく、兩方より切り始むべし。此所にて、よほど心して切らざれば、皆、切りおとすうれひあり。第四圖の如く、一ッ切りたれば、少しずらして重ね、一ッ切るたびに、先の方へめぐらし、順序よく切らば、第五圖の如く、この葉のかたちにあるべし。よく〳〵圖に依つて、考へ切るべし。さて、右の如く切上げたれば、蒸籠にてむし、よく蒸上げたれば、この葉の如く、しかと切目附き、少しもはなれぬ樣なりたるを、そばしたじの中に入れ、よくつゆのしみたるのち、附合せなどに用ゐるべし。



第一圖

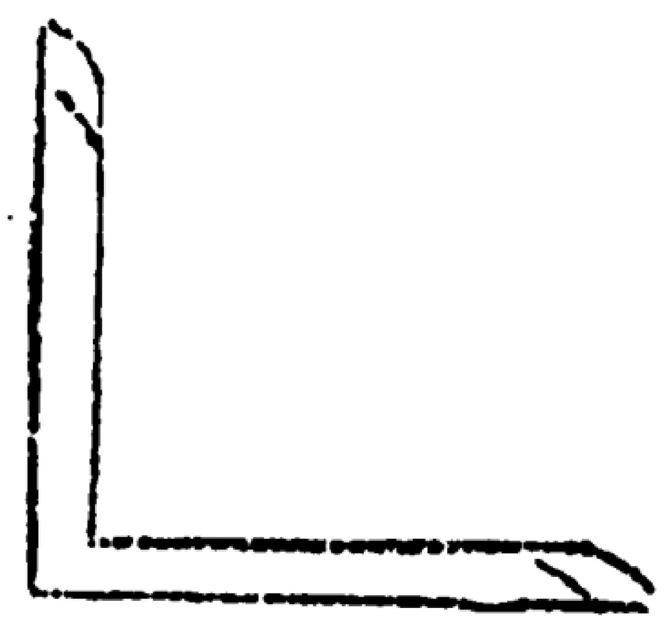


第二圖

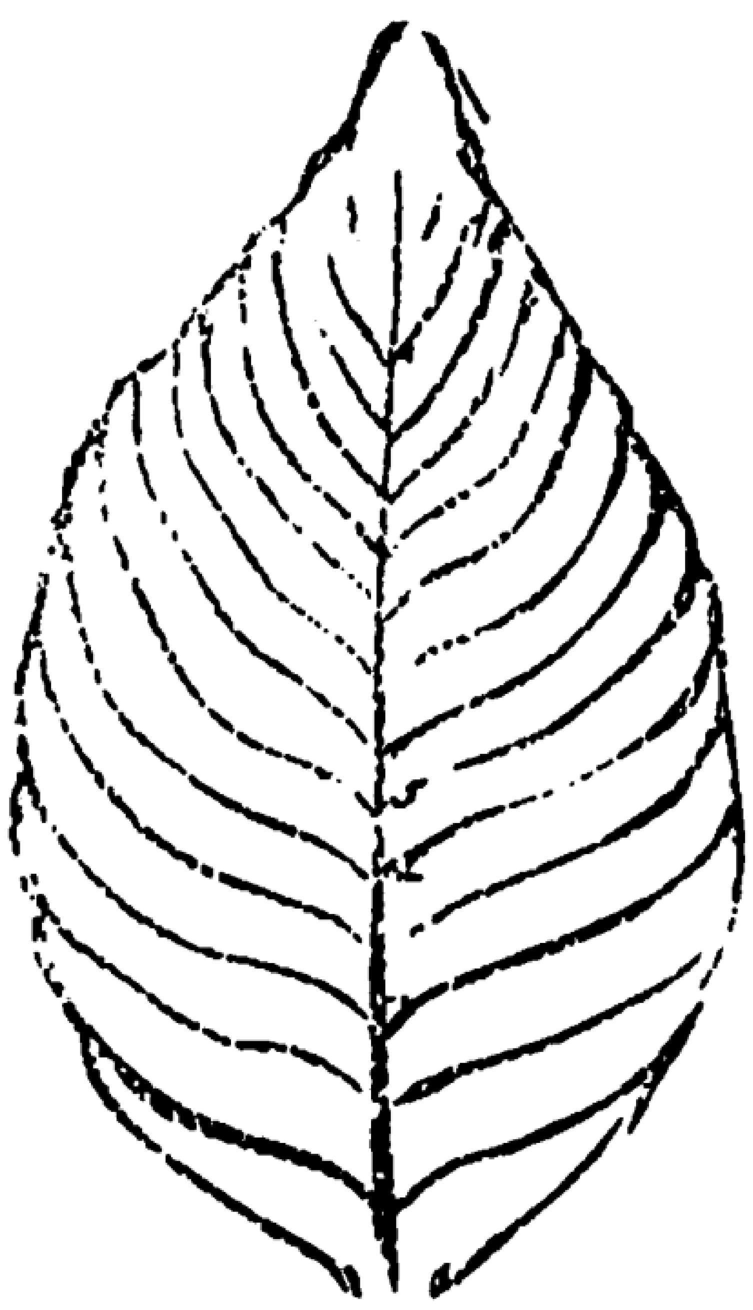


第三圖

第四圖



第五圖



だいどころ

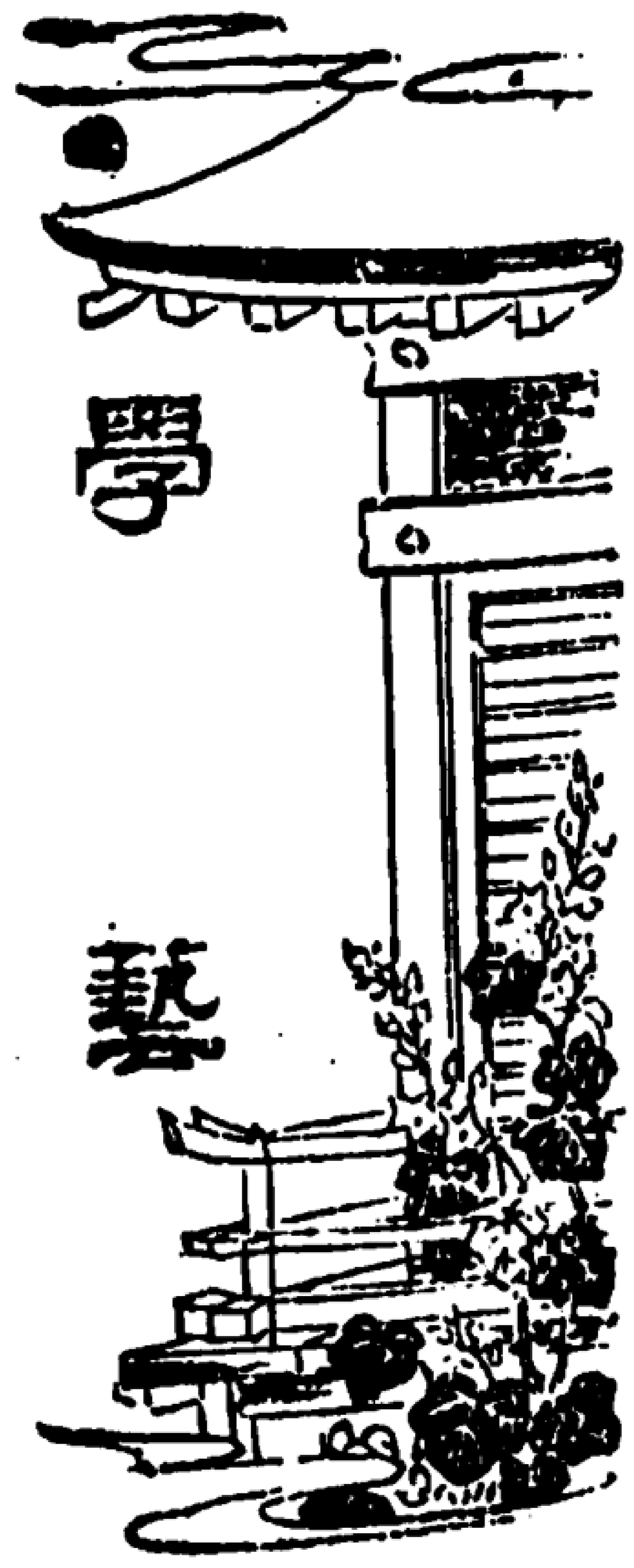
蕎麥製方

生そばの好味なるものを製るには、其當日から挽し、次に、中挽して中皮を去り、本挽をなし、極めて、こまかき絹ふるひに掛け、製したる粉、二升計に、五合程のそばがきを加へ、能くこね交せ、少しづゝ水を注ぎ、充分に力をいれて、こねあげ、三つ位に分て玉になし、ござに包みてふみのばし、後、板にのせ、めん棒にて打のばし一寸位にたゝみて、小口よりきり、沸騰したる湯の中に投じ、ゆであげ、水にて能く洗ひさらすべし。つなぎに、小麥粉、鷄卵抔いるゝは、眞のきそばにあらず。そばは、其の臭味と、歯障りとを、賞翫するものなれば、眞のそば好きの人の食するには、小麥粉、鷄卵等を加へ、他の臭味なき方よろしきなり。又、小麥粉をつなぎにいれて、製するには、そば粉一升に、小麥粉五合程いれて、水にてだん／＼にこねあげ、ござに包み、ふみのばし、前の如く板にのせ、めん棒にて打のばし、能程になりたる時、たゝみて、小口よりきり、ゆでるなり。又、いもつなぎと云ひて、づく芋の皮を去り、摺金にておろし、摺鉢にて能く摺り、水にて、粉をこね得る丈、能程にのばしたるものをいれ、こねて前の如くするなり。



饂飩の製方

上等の小麥粉一升に、鹽五勺の割合にて、水にとかし、其の水にて、小麥粉をこね、ござに包み、ふみのばし、前のそばの如くなし、ゆでるなり。又メリケン粉一升に、鷄卵五個、鹽少量を加へ、能くこねまぜ、前の如くなして、ゆであがりたれば、水にて、能く洗ひさらせば、黄色にて見事なり。味もよろし。又、鷄卵の白身と、黄身とを別にして、つくれば、黄白のもの出來るなり。



國文學講義

井上頼文

紫式部日記講義（廿二）

今と、せさせ給ふほど、御もの丶けの、ねたみののしるこゑなどの、むくつけさよ。

げんの藏人には、しんよあざり、兵衛くらうどには、そうそ、と、いふ人、右近の藏人には、はうぢうじのりし、宮の内侍のつぼねには、ちそうあざりをあづけたれば、もの丶けに、ひきたふされて、いといとほしかりければ、ねんがくあざりをめしくはへてぞ、のゝしる。あざりのげんのうす

きにあらず、御もの丶けの、いみじう、こはきなりけり。

宰相の君のをき人に、ゑいかうをそへたるに、夜ひとよ、の丶しりわかして、こゑもかれにけり。御もの丶けうつれ、と、めしいでたる人々も、みなうつらで、さわがれけり。

釋義

○いまと、せさせ給ふほど、　今、後産をせさせ給ふ間の意なり。後産とは、御胞衣の下る丶こと。

上に、のちのこととまだしきに、と、ある首尾なり。古文には、か丶るつゞけがらおほし。ふと見れば、文理混雜したるやうにて解しがたし。注意してよむべきなり。

○むくつけさよ　むくつけは、おそろしきうちに、いみ惡む意のふくまりたる辭。

○げんの藏人　源のくらうどにて、女房のよび名なり。下の、兵衛藏人、右近藏人、宮内侍局など、みなおなじ。

○しんよあざり　心譽阿闍梨といふ僧なり。以下、そうそ、ちそう阿闍梨、法住寺の律師、ちそう阿闍梨、ねんがく阿闍梨など、いづれも、よりましを引受けて加持する僧侶なり。阿闍梨、律師のことは、上にいへり。

○もの丶けに、ひきたふされて　物怪のために、よりましの女房が、引倒されてなり。

○いといとほしければ　甚、カワイサウなればの意。

○宰相君　よりまし、と、なりたる女房の名。

○をき人　招き人の意にて、よりましに、物怪の憑くべきやうに、招き寄するわざをする人にて、そのをき人は、すなはち、ゑいかうなり。

○ゑいかう　僧の名。

○さわがれけり　かくては、如何あらんと、いづれも、氣をもみたりとの意。

譯解

今、中宮の御後産をせさせ給ふ時にのぞみて、御物怪の妬み騒ぐ聲の、ニクラシクモ、オソロシさよ。

さて、よりましとありたる源の藏人といふ女房には、心譽阿闍梨といふ僧、兵衛の藏人といふ女房には、そうぞ、といふ人、右近の藏人といふ女房には、法住寺の律師といふ僧、宮の内侍の局といふ女房には、ちそう阿闍梨といふ僧を預けて加持したれば、よりましの人々は、つよき物怪のために、引倒されて、甚だ、カワイサウあれば、ねんがく阿闍梨といふ僧を差添へて加持せさす。

さて、宮の内侍の局に憑きたる物怪の、暴くしてかく、ひきたふしたるは、それを預りて加持するちそう阿闍梨が、祈禱の効驗の鈍きにはあらず、御物怪の、甚だ强きが故あり。

また、よりまし、とあれる、宰相の君といふ女房に、物怪を憑けんため、その招き人に、ゑいかうといふ僧をば、つきそはせたるに、夜中、經を讀み、加持をし明かして、聲もかれにけり。

あは、中宮の御物怪の移り憑くやうにと、よりましに召出されたる女房たちにも、のこらずは移らぬ故、いづれも、氣をモミたり。

家計簿記講義（承前）

磯部武者五郎

記入例題

これより、一ヶ月間の收支に係る題を掲げまして其の記入方を示します。

明治三十四年十月

一日
一賄費の內へ二十圓支出す
一長男中學校授業料二圓五十錢支出す
一次男小學校授業料二十錢支出す

四日
一貸家料某氏より（十月分）十圓某氏より（十月分）十五圓收入
一衣服仕立賃三圓仕拂ふ
一所得稅附加稅共二十圓支出す

六日
一兩親へ小遣として十圓支出す
一長男へ小遣として一圓渡す
一銀行預金利子四十圓收入

七日
一不用簞笥一棹賣拂代五圓收入

一郵便切手二十枚買入六十錢仕拂ふ
一某氏某氏來客西洋料理注文二圓十錢仕拂ふ

九日
一電話使用料九圓支出す　但何月より何月迄
一何々書籍購入二圓仕拂ふ
一簞笥一棹買入十五圓仕拂ふ

十二日
一賄費の內へ十圓支出す
一某氏婚姻に付五圓にて鰹節を買求め贈る

十四日
一大工三人の手間賃、及び材木の代六圓仕拂ふ
一植木屋へ二圓支拂ふ

十五日
一醫師へ藥價及び診察料として五圓支出
一下女二人へ十月分給金五圓支出

十七日

一新聞代壹圓仕拂ふ
一在英國ロンドン某氏へ電報出し金十圓支出
一教育會會費何ヶ月分一圓支出

十八日

一朋友某氏に不幸あり香奠壹圓を贈る
一慈善會へ五圓寄附
一洋服屋へ金拾圓仕拂ふ

二十日

一俸給二百圓受取る
一某銀行へ二十圓當座預け入る
一賄費へ四拾圓支出
一良人小遣二十圓自分小遣五圓支出

二十二日

一公債證書百圓券壹枚購入九十五圓仕拂ふ
一乘客につき菓子、鮨買求む壹圓仕拂ふ
一來客用煙草壹圓買求む

二十五日

一在大阪の親戚病氣に付き主人出張汽車賃其の外使用として二十圓支出す

二十七日

一据風呂修繕し四圓支拂ふ
一雜誌代五十錢支拂ふ

二十八日

一シャツ一枚買入二圓支拂ふ

三十日

一車屋へ二十圓支拂ふ
一某氏より貸地料十圓收入

以上の例題を先づ日記帳に記入して御覽に入れますれば、即ち左の如くあります。

（以上の例題は、只記入法を示すに止る積であります故、買物の價には、深く注意しませんでしたから、其の積で御覽を乞ひます）

34年 月	日	摘要	受 圓	受 錢厘	拂 圓	拂 錢厘
10	20	前丁より遞	270	000	166	400
〃	〃	賄費			40	000
	〃	小遣費(良人)			20	000
	〃	仝上(自分)			5	000
〃	22	證劵類(公債證書百圓一枚)			95	000
	〃	交際費(來客に付菓子鮨買求)			1	000
	〃	仝上(來客用煙草)			1	000
〃	25	臨時費（大阪の親戚病氣に付主人出張汽車其外使用）			20	000
〃	27	修繕費(据風呂直し)			4	000
	〃	敎育費(雜誌代)				500
	〃	被服費(シャツ一枚)			2	000
〃	30	車馬費(車屋代)			20	000
	〃	貸地料(某氏十月分)	10	000		
			280	000	374	900
		差引收入不足	94	900		

學藝

34年 月	日	摘要	受 圓	受 十錢厘	拂 圓	拂 十錢厘
10	12	前丁より送	70	000	85	400
	〃	賄費			10	000
	〃	交際費(某氏婚禮に付祝として鰹節壹函を贈る)			5	000
	14	修繕費(大工三人及材木拂)			6	000
	〃	仝上(植木屋)			2	000
	15	衞生費(醫師藥價及診察料)			5	000
	〃	諸給料(下女二人十月分)			5	000
	17	敎育費(新聞代)			1	000
	〃	通信費(在英國ロンドン某氏へ電報出す)			10	000
	〃	敎育費(敎育會々費何ヶ月分)			1	000
	18	交際費(某氏不幸に付香奠)			1	000
	〃	雜費(慈善會へ寄附)			5	000
	〃	被服費(洋服屋代)			10	000
	20	俸給(十月分)	200	000		
	〃	預金(某銀行へ當座預)			2	000
		次へ	270	000	166	400

注意　欄内の縦線は赤なきよしとす(墨)にて差支なけれども

34年		摘要	受		拂	
月	日		圓	十錢厘	圓	十錢厘
10	1	賄費			20	000
	″	教育費(長男授業料)			2	500
	″	仝上(次男仝上)				200
	4	貸家料(某氏十月分)	15	000		
	″	仝上(某氏十月分)	10	000		
	″	被服費(衣服仕立賃)			3	000
	″	租税(所得税附加共)			[illegible]0	000
	6	小遣費(兩親へ)			10	000
	″	仝上(長男へ)			1	000
	″	利子(銀行預金利子)	4[illegible]	000		
	7	雜收入(不用簞笥壹棹賣拂代)	5	000		
	″	通信費(郵便切手貳拾枚買入)				600
	″	交際費(某々氏來る西洋料理)			2	100
	9	使用料(電話何月より何月迄)			9	000
	″	教育費(何々書籍買入)			2	000
	″	道具費(簞笥壹棹買入)			15	000
		次へ	70	000	85	400

學藝

日記帳

明治三十四年十月

文林

秋笛　東久世通禧

笛の音のすみまさるかな月きよき
あきの夜いたく更やしつらん

故郷擣衣　高崎正風

野となりてうつらなくへき故さとに
あはころもうつ音のきこゆる

初紅葉　鍋島直大

秋風はまたひやゝかにあらねとも
やまのもみちは色つきにけり

岡紅葉　津輕承昭

賤の男かをしねかりはすかたをかの
はゝそのはやしもみちしに鳬

深夜鴈　長谷信成

庵ちかき里のきぬたもうちやみて
ふけたる月にかりそなくある

暮秋月　宮地嚴夫

暮れてゆく秋のすゑ野のすゝきはら
ほのかに見えて月そのこれる

鴈の聲をきゝて　北郷久政

なき渡るはつ鴈か音のきこゆなり
小田のたりほやいろつきぬ覽

秋日山行　坂正臣

もみち葉にこゝろとられて幾度も
山路のいしにつまつきにけり

瀧邊紅葉　植松有經

奥やまの瀧のいはねのもみち葉は
しふきにかわく時なかりけり

馬上月　　鎌田正夫

のる駒の黒かみの上につゆみえて
　月かけさむく夜はふけにけり

杜紅葉　　蜂賀須隨子

時雨にも濡しとおもふをいかにして
　みかさの杜はもみちしつらん

山寺暮秋　　鍋島榮子

秋深きもみちのかけにやまてらの
　いりあひの鐘をけふもきくかな

田上鴈　　前田朗子

吹風のみにしむゆふへをやまたに
　おちくるかりのこゑそ聞ゆる

野鴈　　南鄕柳子

霧こめし秋の野するを見わたせは
　と渡るかりのゆくへしれすも

曉紅葉　　西四辻茂子

我宿のにはのもみちのこすゑより
　まつあけわたるあかつきの空

旅宿鹿　　柳原愛子

男鹿なく片やまさとにたひねして
　あきのあはれを思ひしりぬる

聴露　　大谷章子

庭の面の芝生におけるしらつゆに
　あり明のつきのかけそにほへる

秋水鄕　　小川直子

落あゆのいろもさひゆく水の面に
　もみちうつらふ玉しまのさと

河霧　　中島歌子

たち覆ふ霧にかくれてさかはかは
　海のさかひもみえすなりぬる

菊をかさして　　河村重子

嬉しくもまたあからへて菊のはな
　かさす秋てそたのしかりけれ

月の歌詠る内に

諏訪忠元

暮山月

夕日影いりてをくらきやまのはを
いつるもおかし秋のよの月

旅泊月

苫のうへをてらすも白し舟はつる
むろのとまりの秋のよの月

月爲友

今さらにたれにかつけん友として
みつるこよひの月のひかりを

月照流水

淀みなくなかるゝとねの川水に
つきの影さへすみわたりけり

月前眺望

鳴むしもみゆる計にはるゝと
野末をてらす秋の夜の月

月夜聞笛

つきすめるあきの末野をとめ行けは
いつゝともおくふえのねはする

菊（長歌）

下田春興

ねわけせしこその白菊
庭のせに植ゑおふしつゝ
朝にはちりうちはらひ
夕にはみつうちそゝき
あさ夕にこゝろを盡し
ねもころに土かひぬれか
露おけと薫ひもうせす
霜おけと色もかへせす
長秋ににほひ榮えて
その花の色香の内に

千代そこむれる

反歌

露霜をいたゝきてすら白菊の
千代の色香はかはらさりけり

禁廷菊

とつ國の人もめされてこゝのへの
みそのの菊をめつる御代かな



漫録

「トルーアント」學校制とは、英國最近の創設に係り、怠惰なる子弟を收容して、嚴粛なる紀律の下に、其の惰風を矯むる目的に因り、成りたるものにして、不良子弟の教育上、極めて有益なるに依り、茲に參考の爲め、之を譯載しぬ。

「トルーアント」學校

宮館さだ子譯述

（一）トルーアント學校創設の理由

馬を河畔に伴ふことを得べし、然れども、何人も、之をして強て飲ましむること能はず、と云へる古諺の眞理は、小學教育に從事する人々の、屢實驗する所なり。

千八百七十年の條例に依り、議會は、強制的に兒童の登校を命じ、後年、更に、一條例を發布して、小學教育の費用を全免せり。夫れ、此の如く、議會は、教育普及の目的に因りて、兒童の出校を正確ならしむるに、必要なる各種の措置方法を講じ盡したるに拘はらず、尙且、缺席勝の學生、幷に、殆んど濟度すべからざる怠墮生の、跡を絶つこと能はざるは、洵に歎ずべきに非ずや。必竟するに、父兄の監督其の宜しきを得ざるに基因するもの、もとより尠なからざるべしと雖も、子弟の頑陋にして、父兄戒飾の効果なきもの、亦、決して稀有に非ざる也。故に、子弟の怠漫不規律にして、父母監督の不行屆に基くこと瞭かなるに於ては、裁判官の審査を經て、其の父母に對し、罰金、又は、禁錮の刑に處すること、もとより當然なり。然れども、學務局の苦慮する所のものは、父母の監督周到なるに拘はらず、其の子弟の改悛せざる場合に於て、尙且、父母に對して、其の都度、刑罰を課するの極めて穩當ならざるにあり。(記者註、英國に於て、十四才以下の兒童にして、登校せず、又は、缺席したるときは、其の父兄を裁判官の面前に召喚し、訊問の上、罰金の刑に處し、處罰再度に涉りたるときは、禁錮に處するの制也。)從つて、此の如き墮落子弟に對して、如何なる方法に依り、小學教育を與ふべきやの問題を惹起し、審議の末、此の問題を解決したるは、則ち、「トルーアント」學校の創設なりき。

(二)ミドランド定期トルーアント學校

「トルーアント」學校の中に就ても、其の組織の最も完備せるは、リッチフエールドに於ける、ミドランド「トルーアント」學校にして、視學官の報告に據れば、同校は、英國中に於ては、第二位を下

らざるべしと云へり。
同校は、バルトン、ワルソオーン、及び、西ブロンウヰイチ三學務局の共同設立に係り、亦、其の共同管理に屬するものにして、建築費用は、各々全額の三分の一を醵出し、維持費も、亦仝じく、全各學務局より、四名づゝの管理者を選出し、合計十二名の管理者は、同校各般の事務を管掌するなり。
建築は、斬新なる意匠に依り、特に、其の目的の爲めに設計せられたるものにして、位置は、リチフイールドの郊外にて、最も健康に適し、且つ、風景の佳良なるを撰びたり。學校財産は、數エーシルの敷地、庭園、校長、敎師、及び、雇人等の役宅、食堂、敎場、寄宿舍、病室、傳染病室、浴場、仕立店、洗濯所、操練場、フートボール競技場、庖廚、消毒窯、寢室、及び、其の他一切の施設を包含し、總費用十四萬磅を要したり。校舍、及び、器具等は、生徒百名を敎養するに足る。
學校職員は、校長、主姆各々一名、敎師二名、體操敎師一名、仕立職、洗濯婦各々一名より成り、幷に、其の他、數多の常務雇人を使役せり。
同校の設立は、今を去る七年前にして、創設の當時に於ては、二三週間、生徒、唯一名のみなりしが、漸く増加して、現時に於ては、稍もすれば、生徒定員數を超過せんとするの傾あるより、當局者は、定數員以内に、之を減少せんとして、毎に、苦慮する程なり。而して、同校生徒は、唯、バルトン、ワルソウール、及び、西ブロムウヰイチ三地方の怠墮生のみならず、普ねく、全英國の各地方よりも派遣せられ、特に、倫敦學務局の派遣に係るもの、最も其の多きに居れり。之が爲に、各

學務局は、其の派遣に係る怠惰生の、同校在學中、學生一名に付き、毎週、六志六片を支拂はざるべからず。右は、バルトン、ワルツウオール、及び、西ブロムウィチ三學務局の負擔額、幷に、政府の補助金と合して、同校の維持費に充つ。

（三）怠惰生收容の手續及放還後の監督

先づ、怠惰生收容の、一般手續より說明すれば、小學生徒にして、總ゆる手段方法を用ふるも、尙且、規則正しく、學校に出席せざるものあるときは、裁判官は、出校命令書を發して、同生徒の出校を命ずるなり。而して、同命令書の送達を受くるも、尙、改悛の狀なきときは、茲に始めて、「トルーアント」學校收容を命じ、同時に、同校在學中、其の父兄の支拂ふべき、毎週の費用額を決定するなり。此の金額は、通常極めて少く、其の徵集は、警察官之に任じ、全部徵收の上にて、同金圓を內務省に納付し、學務局は、敢て之に關係せず。

裁判官が、怠惰生に對して、「トルーアント」學校收容を命じたるときは、警察官は、直に、同命令を執行するなり。此くして、一旦、同校へ收容せられたる學生は、學校管理者の認定に依り、三ケ月、又は、四ケ月間在學の後、釋放劵を與へて歸宅を許すも、若し、歸宅後、學事怠慢の行爲ありたるときは、學年々限、則ち、滿十四才に達する迄の間に於いては、別に、裁判官の命令を要せず、警察官は、直に、之を引致して、再び、「トルーアント」學校へ收容するを得べし。其の三回四回に涉るものも、また同じ。歸宅を許されたる後に於ける學生の、學校出席、及び、其の他の學事成績は、必ず、「トルーアント」學校長に屆出づべく、學校長にして、其の成績良好ならずと認むるとき

は、先づ書面を以て、其の改悛を促し、而して、尙は、改悛の狀なきときは、再び引致の上、收容せられ、三四ヶ月間の訓練を加へらるべきものとす。此の如き學生に對しては、再度收容の際、鞭撻を加へたりしも、現時に於ては、內務大臣の訓令に依り、之を廢止せり。

(四)敎育の主義及び日課

「トルーアント」學校に於ける敎育上の主義は、嚴正なる指導の下に、恩威並び加へて、高尙なる思想を涵養せしむるに在り。生徒の學課、及び、作業は、總て、此の目的に因りて組成せられ、嚴明なる秩序、淸潔、禮讓等に依りて、多年の頽風を矯正し、幷に、倫理上宗敎上の訓誨に依りて、其心事を高尙ならしむる等墮落生に最も適切なる設備方法を採用せり。

生徒遊戲の爲めに、「クリケット」、及び、「フートボール」等の競技場あり。其の他、附屬圖書館の設備ありて、生徒の縱覽に供す。亦、時々茶話會等を催ほして、種々の娛樂を與へ、日曜日には、必ず禮拜式を行ふ。

宗敎上の訓誨に關しては、或は、近傍の敎會堂に於いて、又は、隨時、學校を訪問する宣敎師の說敎に依りて、間斷なく、生徒の心靈を淸淨ならしめつゝあり。

日課は、毎朝六時に起床、洗漱の後、各室を淸掃す、八時朝飯を喫す、八時半祈禱、九時學課、又は作業に就く、十二時體操、一時晝飯を喫す二時再び學課、又は作業に就く、其の順序は、午前中學課に就きたるものは作業、作業に就きたるものは學課、五時再び體操、六時晩食を喫す、六時半必要なる雜業を終りたる後、隨意休憩、七時半祈禱、八時就床。

(未完)

各國婦人の特色

三石直方

▲他の長は、眥て我が短を補ふべし、他の短は、以て反省の料とすべし。
▲たゞ我が長をすてゝ、他の長短をあはせとるとの愚をなすべからず。

第六章　支那婦人

（其一）　支那婦人の風俗

所變ればしな變る、北京婦人の風俗こそ面白けれ、同地にては、女兒は生れて三日めに、父親が名を命け、十四五歳迄は、此の乳名を呼ぶことゝなるが、十五六以上になれば、外にまた名をつけ、夫よりは、舊名を云はず、唯姉妹幾人もあれば、姉を大姑娘（長女といふこと）妹を二姑娘（次女）其の妹を三姑娘（三女）と、順を呼ぶものゝ由。總じて、支那にては、小間使、妾、或は、藝妓抔迄、

皆夫々の名ありて、其の名をいふ故、これらの下等の女と別つため、良家のお孃さま方は、十五六才以上になれば、其の名を呼ばぬ譯ありと。扨て、夫より人の妻となりて、結婚が濟めば、其の夫が官吏なれば、夫人を大々、商人なれば、奶々といひ、其の舊姑は、長男の媳を大媳婦、次男のを二媳婦といふなりとぞ。頭髮は、十五六才迄は、男子のと同じけれども、顔に白粉を施け、耳朶に環を下げ、衣服、及び、服裝の色模様抔が、男子のと違へば、是にて、男子の區別が分るよし。夫より十五六才以上になれば、上頭といひて、始めて、髮を結ぶ。又、上流の婦人は、内に閉ぢ籠りて、容易に、外へ出ることなく、若し、外へ出ることあれば、必ず、馬車か轎に乗り、決して、街上を歩くことなし。徃々、驢に乗りて行く婦人があれども、夫は、皆、田舎の婦人にて、北京市中の者

にてはなく、又、此の頃馬車が出來て、是に乘るものあれども、夫れも、市中の婦人にてなき由なり。（富士）

以上は、目下北京婦人が、風俗の一班にして、茫茫たる四百州、其の風俗の千態萬狀なる、固より、一々之を擧ぐ可からず。而して、支那婦人は、其の内に於て如何なる位置權力を持てるかを見るに、實際家事向、其の他一切內政に就ては、殆んど、女子獨尊にて、男子は、婦人に向つて、其の是非を爭ふと能はず、殊に、妻あるものは、妻を畏るゝと甚だしと云ふ。然れども、流石に男尊女卑の國柄とて、婦人が、社會上に於けるの權力位置は、其の影をだに見る能はず、然れ共、支那婦人は、個人としては、氣力もあり、節操もあり、前途進取の見込あるものなり。唯數千年來の舊慣弊習は、容易に打破すべからず。婦人は、內を守り、男子にのみ從ふものと、妄斷せられしなり。

○廣東婦人の日常　風姿鮮麗なるに似もやらず、最も活潑に、且つ、最も勤勉なるは、廣東婦人を以て、其の魁とせざるを得ず。他部落婦人の如く、阿片の吸食もなさず、且つ、頗る節操高ければ、隨つて、淫猥なる所業も尠く、夜中淫を賣つて食を求むるが如きは、斷じて之なしと云ふ。婚姻は、其の夫たるもの、資産、如何に乏しくも、如何に、其の日を過す能はざる程の赤貧者たりとも、少しく學識あり、智能あり、勤勉なるものあらむには、貧は時の運なり、又、何時如何なる幸運に接せざらめやはと、毫も、其の夫の貧富に拘泥ざるもせの丶如し。故に、入嫁以來、極めて親切に、其の夫に事へ、夫の業を助くるなり。由來同地にて、最も重んじ、最も唱導する所のものは、讀書耕作なり。讀書は、

夫の業にして、耕作は、婦の務なり。蓋し、從來、傑物の同部落より頻々として出でしもの、豈、遇然なりと云ふべけんや。同婦人の平素自から任じ、而も、且つ、之を行ふ常務なりと云ふを聞くに、婦は、必ず、朝拂曉に床を脫し、先づ、髮を櫛り、鬢毛を散さず、次に、朝食の仕度をなすと同時に、昨夜來の食器を收めて、之を洗ひ、夫に朝食を供し、之より衣裳などを洗濯として、河に往き、了つて、田園の事に從ひ、寸時と雖も、徒に過すことをなさず。其の余輩が、萬巒庄より內埔に至るの間、路の兩側に、耕耘に從事するもの、或は、稻苗を取り、或は、植付をなし、草を去り、稻田を耕す等、種々の方法を見たるも、凡そ、之に從ふものは婦人にして、男子は、偶々ありとするも、極めて僅少なりしなり。

婦人の耕作たるや、我內地に於ても、勞働社會に於ては、珍らしき話にあらねど、兎に角、同部落に於ける婦人は、家の貧富に關せず、必ず、之に從ふものにして、且つ、以上の如く、勤儉なる點に至りては、蓋し、我內地婦人の數步を讓る所、況んや、遊惰奔逸に流れし、本島全體の婦人輩に至つては、其の差、豈、雲泥月鼈の比ならむや。故に、此の地方に於ては、從來、投機的事業のあるなく、又、商を疎んじたれば、巨萬の品を致せしもの少く、僅に、內埔街に於て、二萬圓位の資產家の、三四人に過ぎすと云ふ。左れど、又、それ丈け貧者も少く、殆んど飢渴に苦しむ如き慘狀は、見るだに之なしと云ふは、畢竟、婦人の能不能に因れるなりとぞ。（臺灣）

（其の）支那婦人と敎育

敎育の不進步なる支那程の邦は、例少なかるべし。即ち、進士とか、秀才とかの拔擢試驗、我邦の高

等官登用試驗の如きものに、猶、四書五經の註釋をなさしめ、詩を賦し、古文辭を作らしむと云ふ位なれば、他の婦人の方面にては、我が維新前の、寺子屋流の行はるゝを知るべし。

唯、近時、北京其の他繁盛の都會にては、漸く、泰西の風に則れる、婦人教育の學校現出するあらんとす。左に錄する所の如きは、即ち其の一なり。

○支那女子高等女學校新設計畫　此の女學校と云ふは、主として、支那上流社會の女子の爲に建設するものにして、其の校則中には、「纏足は、古來の悪習慣なるが故に、入學者は、互に此の悪風習を廢する樣に勸告すべき事。」「現在にては、餘儀なく、纏足者も入學を許可すべしと雖も、數年後には、斷然之を謝絕する事。」「本校の徳育は、儒教を基礎とす、故に、祭壇を設けて、孔夫子を祭る。」等の個條あり。

校内には、二人の舍監ありて、女生の監督をなす。其一人は、外國婦人にして、他の一人は、支那婦人なり。此の他、四人の教師ありて、内二人は、主として、外國語を教え。學科は、種々にして、範圍廣く、先づ、綴字、文典、讀本等を初歩とし、其の後、歴史、地理、哲學、及び、算術等を授く。應用學科としては、數學、法律、及び、醫學等の專門科あり。專門科は、一科に限り撰修すべく、但し、醫學、又は法律を學ぶものは、數學上の適當なる知識を要す。又、以上三科の外に、將來、教育に從事する志望者の爲に、師範科を設備するの見込あり。又、校費餘裕あらば、紡績、織物、畫學等の手藝をも授くべしと云ふ。

是等は、最も斬新の設計にて、總べて、此の種のものは、多くは、基督教傳道師の斡旋に成るもの多し。實際、純粹の支那的學校は、見るの價値な

く、又、婦人教育として、特に指すべきものなきが如し。

女子要書解題（己之部）

三浦千畝

後宮略傳　一巻

著者詳かならず。且つ、前後欠損ありて、完きものにはあらざるが如し。帝國圖書館本によれば、近衛帝の中宮、藤原呈子（九條院）より、光嚴帝の後宮、壽子内親王（徽安門院）まで、四十八人ばかりの略傳あり。（此の書、大日本史后妃傳中にも引用せられたれど、近衛帝の中宮、藤原呈子より、光嚴帝の妃、懽子内親王まで見え、其の前後には見えざれば、同じく殘欠本に據られしものなるべし。）

後宮名目　三巻一冊

此の書、奥書には左の如く見えたり。

右二冊者、御櫛笥殿中將爲兼女大納言作而、献ニ鎌倉將軍家之御臺所ニ之書也、后宮之故實不レ可レ過レ之、秘ニ于函底ニ不レ可レ許ニ他見ニ者也、

元龜三壬申年仲秋　中原職忠判

然るに、伊勢貞丈の、此の奥書に付きての考あり。左の如く云へり。

貞丈按、大納言爲兼は毘沙門堂（冷泉）大納言爲兼卿歟。伏見院永仁年中比の人也。鎌倉將軍とは、其比にては惟康親王歟、久明親王歟の内なるべし。然るに、此書御火とりの條に、建武年中の事を記したり。光嚴院正慶二年、高時敗軍自殺、守邦親王剃髮、其明年後醍醐天皇重祚、建武と改元あり。此年より鎌倉に將軍なし。然れば、鎌倉將軍の御臺所に献ずる書也と云は、妄說也。建武より以後に書た

るものあるべし。實は中原職忠の自作なるべし。職忠は僞を好む人也。職原抄の追加も桃花老人の御作と稱して、實は職忠の作也と聞及たり。職忠奥書の諸書には、問疑はしき者あり。心を付て見べし。職忠の作にもせよ此書捨つべき者にはあらず。取るべきことをは取べし。

貞丈の説、いかにも當れるが如し。しかし職忠が、特更に、冷泉爲兼女の作と書きたるも疑はし。想ふに、古く、かく云ひし書の殘篇などありしを、職忠の書加へ、かゝる奥書さへそへて世に出しゝなるべし。猶、この書は、正德二年に、或人增減し、女中道しるべと題して、出せるがあり。その書の序文によれば、この書、また、女名目抄とも云へるものゝ如し。道しるべの解題と相參看すべし。

壺範記　一巻

作者詳かならず。德川氏代々の夫人、侍女等の傳にして、家康の母、傳通院夫人水野氏より、十代將軍家治の侍女藤井氏(養蓮院)まで、凡そ五十人ばかりを記せり。漢文なり。一々引用書を註記したれば、參考となること多し。著作年代は明かならざれ共、多く以貴小傳を引き、又外戚傳をも引用したれば、いづれ寛政已後、文化文政わたりのものなるべし。

古教訓　一巻

大高坂芝山の妻成瀨氏の著にして、續女則第二に入りたり。序に『昔、わがせな喬松子、冠を加ふるよはひなる比にてもやありけむ、拾遺君のたのませ給ふことといなみ難く、無名訓といふものを撰びてたてまつりしに、(中略)口つきこは〲しう、詞の花うるはしからずと、くやみ、

わらはにめいじて、あらため作れと云ひし折ふし、仰せごとありて、女則をかけるにつけて、其の詞のをんなの學びとなりぬべきは、十の中一つ二つぬきでゝ、かの巻にいれ侍り。可不可のいはれもなき詞は、ひたぶる削り棄しが、なは、殘れることの葉あまたなるをあつめ、間、我筆をそへて一巻とし、古教訓とぞ名づけ侍りける。云々。』と見ゆ。これによりて、此の書の大概と、その成りし故由を知るべし。(無名訓の解題に、著者詳ならずと、記ししは誤なりき。今、此の書の序によりて、著者は大高芝山なりしことを知りぬ。こゝに追記して、その粗漏を補ふ。)

詠史百首(加藤千浪作)評論

海上胤平

准后親房卿

五十鈴川ながれの末のにごらぬは
くみしる君のあれはなりけり

くみしる君のなからむには、にごるやうにきこゆるなり。さては、くちをし。あさはかなりや。

尹大納言師賢卿

木かくれし君かもぬけのから錦
こゝろにさへもきたる君かな

師賢卿、天皇の大御身にかはらせたまひて、天皇の御衣を着、叡山へ行幸すとて出たゝせ、其の時のことをいへるにや。木がくれしといへるはよしなし。また、君かもぬけのから錦も、心得ぬいひざまならずや。心にさへも云々、いかな

る意味かありけむ。了解しがたし。また、君といへること二つありて、そもくるしきあり。

御輿さへかたふくはかり吹あれし
　　日枝の嵐も恨みましけむ

　　中納言藤房卿

月かけの鷹の巣山にいりしより
　　雲井はくらくありにけるかな

建武二年三月十一日、八幡行幸供奉を限として、北岩倉といふ所に赴き、不二坊法一といふ僧を戒師として、遂に、多年拜趨の儒冠を解き、法體となりしことと太平記に見ゆ。又、吉野拾遺に、畑時能、鷹巣山より歸りて、新田義助にいふ。山中僧に逢ふ、其面藤房卿に似たり云々。若、これを卿としても、この時はじめて世をさけたるにあらざれば、此の歌の如く、たゞちに、鷹巣山に入りたるやうにいひては、叶ふべからず。

事實も辨へず、みだりに虚言をいへるあるべし。

行末はおもひはからて此君の
　　世をそむきしそ恨みありけり

　　千種忠顯卿

北風に野への千草はかれたれと
　　こゝろの花はいまもにほへり

三句、かれたれどゝいへる、例の口くせにて、げす〱し。また、あなぐりいはむには、野邊の千草は枯れたれどにては、心の花にうちあはず。千草はたとへていへるなり。こゝろの花はたゞごとなり。たとへ歌と、たゞごと歌と、差別あるべきを、この歌のごとくにては、體をなさず。近頃、詠史の歌にかゝるたぐひ少からず。野邊の千草とかれしかともいはむか。初句北風は、北朝の意をこめてよめるあらむ。されば、捨てがたけれど、調、優ならずして口をし

源義貞朝臣

劔太刀神もうけひく汐干かた
かちわたるべき初なりけり

汐は、ひくといふべき詞なかりしを、近世の俗歌に、此詞見ゆ。汐干かた歩わたるべきと、よめるは、軍に勝ちわたるにきかせたるなるべし。されど、詞たらはで、さはきこえかたし。汐干がたにて戦たるは、勝わたるべき始なりけりとの、意にきこゆるはいかに。さては、事實にたがへり。二句、三句、つゞきよろしからず。此歌、稲村が崎などの詞なくては叶はじ。

やまとめぐり（承前）

井上頼文

頼文いはく、五日の朝とくうちつれだちて、猿澤池のほとりなる旅亭、釜屋をいで、春日神社の神寳を拜觀し、東大寺、興福寺など巡覽し、正倉院の門前にて、諸氏と袂を別ち、おのれと、阿知和氏と二人、車いそがせて、石上神宮にむかふ。やゝ奈良の町をはなれんとするころ、左の方に元興寺の門あり。門よりさしのぞけば、庭中に、塔のみいとさびしげにたてり。

屋代弘賢翁の道の幸に、元興寺は、五重の塔のみ、市中に物ふりて、むかしを思やれば、いとはかなきさまなり。と、いはれたるは、げにさることなり。

さて、この寺は、推古天皇の四年に、聖徳太子、飛鳥の地創立し、初は、法興寺ととなへしが、後、こゝには移れるなり。また、むかし、此の寺の鐘樓に、鬼のすみたる由、日本靈異記に見ゆ。今、おそろしげなる顔して小兒をおどす時、ガモジと云ふは、これよりおこれるなるべし。

蕣福の狂歌に、
うつくしい女を鬼ときくものを元興寺にかまそと
いふは寺の名、と見え、
南留志別に、
わらはべの、ベカカッといふ事をするを、大鏡にはめかかうとかきたり。目をはたけて、元興寺をする處なるべし。
など見えたり。
車はやめて行けば、右に方に帯解寺あり。(奈良元標より帯解村大字今市まで、一里四丁あり)この帯解寺といふは、例の佛家のつくりごとに、本尊の帯解地藏菩薩は、春日の作なり。むかし文徳天皇の皇后、染殿の皇后、御懐胎ありて、三十三月御誕生ましまさず、よりて醫道、陰陽道の術をつくし、天下の靈社靈佛に勅使を立てられ、御禱ありしかども、いさゝかも、その功驗なかりき。

こゝに、春日明神、皇后の御夢に告げさせ給ひけるは、和州添上郡に裙帯の形をあらはしたる地藏尊あり。これを念せば、その難を遁れて、安からんと告げさせたまへり。やがて、此のよしを奏聞ありしかば、天皇叡感ありて、すなはち勅使を立て、御祈誓ありしに、程なく皇子御誕生あり。これ、則ち惟仁親王の御事にて、後に清和天皇と申し奉る。これより大伽藍を御建立ありて、御安產御歡の寺なればとて、號を帯解寺と賜はりき。參詣の人、市をなしけるより、里の名を、今市と呼ぶといへり。僧侶の俗人をひきつくる我田引水的の説には、かくのごとき事おほかり。さて、此の里の婦人は、今も腹帯を着けぬもの多しといへど、例の引水流の談ゆゑ、各戸に就てたしかめざれば、たやすくは信じがたし。現今、衞生家の説に、日本人は、胎内に在る時、きびしく腹帯もて

くゝらるゝ故に、足組かきあり。母たる人は、よく意を注ぎて、帶はゆるくしむべきあり。極端にいふ時は、腹帶は、始めよりしめぬがよろしきありといへり。こゝの地藏のたけ、足の長さは、母の胎内にやどれりし時、帶にてくゝられざりし故ならんかし。

車上より門内さやかに見ゆれば、そのまゝに過ぎぬ。

すこしゆけば、左の方に、在原寺とて、在五中將の古蹟とて、よしありげに見ゆれど、道の幸に、三浦某の順禮には、こと〴〵しくしるしたれど、いとうけがたき古跡にて侍り。

と、あり。

すこし行けば、おなじく左の方に柿本寺といふあり。(奈良元標より櫟本村、大字櫟本まで二里八町なり)

この寺に、人丸塚ありて、石碑には歌塚と書き、銘は百拙和尙の撰なりといへり。壬生二位藤原家隆卿の柿本講式に、

青陽の春の花に、無常の雲一たびおほひ、黃壤の秋の露に、別離の嵐長く吹く。大和國、添上郡、石上寺のほとり、治道森の中に、一の草堂を建て、こゝに、柿本を葬す、身は龍門の土に埋むといへども、言葉は鳳闕の寶となれり。可惜可悲。云々。

藤原清輔朝臣家集に、大和國石上、柿本寺といふ所の前に、人麿の塚ありと聞て、卒都婆に、柿本人丸の墳としるしつけて、かたはらに、此の歌をなん、書きつけゝる。

世をへても逢べかりける契こそ
苔の下にもくちせざりけれ

この歌は、玉葉集にも出でたり。
鴨長明の無名抄に、人丸の墓は、大和國にあり。初瀬へ參る道なり。人丸塚といひて尋ぬるには、知れる人なし。彼所には、歌塚とぞいふなる。云云。

吉野詣日記に、天文二十二年二月二十六日、紹巴の案内にて、此所にまうで給ひて、(逍遙院西三條右大臣實隆公)

けふぞ見る言葉は筆にかきのもと
　もとより朽す殘るすがたは

楢葉和歌集に、かきのもとのまうち君の、いそのかみのはかにて、人々歌よみ侍りけるに、前權僧正範玄、

よしの山さくらを雲とみし人の
　名をは苔にも埋まさりけり

大日本史に、顯昭法師が、人丸勘文に云く。藤原の清輔(後二條帝の御代の人、顯昭の兄)嘗て大和を過ぎ、故老の言を聞けり。添の郡、石上寺の傍に祠有り。治道社と號す。祠邊の寺を柿本寺と號す。是、人麻呂の建つる所なり。祠前の小塚を、人麻呂の墓と名く。清輔、往て之を觀るに、所謂、柿本寺の礎石、僅に存す。人麻呂の墓、高さ四尺許なり。因て率都婆を建て、勒して曰く、柿本朝臣人麻呂墓と。顯昭、按るに、人麻呂、石見に沒す。豈、其遺骸を大和に移さんや。平惟仲、宰府に卒せしに、其屍を洛東、白河に移すが如し。(原書漢文なるを今かきくだし文に改む)など見ゆ。相國寺の大典禪師が人麿事跡考にも說あれど、たしかなることは知られがたし。

おりたちて、腰折歌ありともたむけばやと思へど、行くてをいそげば、拜して過ぐ。

しばしゆけば、石上神宮と記せる石標あり。(奈良元標より山邊村大字石上まで二里廿丁)こゝより左にまがりてゆけば、左の方に、天理敎會の本部ありて、左右には、信仰人の飮食すべき小料理屋、各地信者が宿泊すべくつくられたる旅亭めくもの、あまた軒端をならべたり。遙に左の山の端を眺むれば、いとおごそかに構へられたる墓あり。これ天理敎を興したる天理老婆が墓あり。この墓地は、もと、上古高貴の人をかくしまつりし所ならんを、かしこくもつきくづして、その上に作れるなりけり。あはれ、前方後圓の車塚も、ものしらぬ農夫が鍬さきにかゝりて、むなしく凡人の墓所となりおはりぬ。こもまた、天理のしからしむる所にか。あはれ。

すこしゆけば左側に、小流を前にせる割烹店あり。魚磯といふ。その背後に、いとさゝやかなる寺あり。これ良因寺なり。一名、石上寺、又、良峯寺、今靈藥師堂といふ。天長年中、善守法師住持す、其の後、僧正遍昭もこゝに幽居せる故に、良峯寺とよべりとぞ。境內に素性法の塔とて、苔むしたる石のそとば立てり。

相撰家集に、

　良峯の寺に來てこそ千早振
　　布留の社の紅葉をば見れ

後撰集に、石上といふ寺にまうでゝ、日の暮れければ、夜明てまかりかへらんとて、とゞまりて、此の寺に、遍昭侍りと、人の告侍りければ、ものいひこゝろみんとて、云侍りける。小野小町。

　石の上に旅寢をすればいとさむし
　　苔の衣を我にかさなん

　返し。僧正遍昭

世をそむく苔の衣はたゞ一重

重はうとしいさ二人ねん

と見ゆ。

小野小町は、遍昭の、いまだ良岑の宗貞といひける頃、深く契をむすびけり。後、宗貞は、髮を薙ぎて、桑門に入りしかば、忽ち鴛鴦の夢破れ、同穴のちかひもむなしくなりぬ。されど、そのちかひをかへじ、操を汚さじとて、あだしをとこには從はざりけり。かゝる節操をも知らで、小町は、才學に誇り、人を人とも思ひたらず、年老い衰へて、たのみすくなくなれりければ、

花の色はうつりにけりな徒に
我身よにふるながめせしまに

と悔い、

文屋康秀の三河椽となりて下る時、誘れければ。

わびぬれは身を萍の根をたえて
さそふ水あらはいなんとそ思ふ

と、よみて、憐をこひけりと、むげにおとしめいへるは、皮相の見といひつべし。徒につれなき浮世をながめくらして、あぢきなく花の色香のうつろひにけん、心のうちこそあはれなれ。身をうきくさの根をたえて、さそふ水あらばと、うちいでつれど、ともに三河にくだりたりとも覺えず。這般の消息を知らまくせば、本居内遠翁の、小野小町考を見てその一班を伺ふべし。（以下次號）

衝口漫言（八）

白松園主人

○雲水の身

雲水に從ひて漂流す、とさへ云へば、世事の係累を脱却して、多少の詩的趣味を含蓄すれども、余輩の生活は、此の如く放縱自適なること能はず。

されば とて、浮草のさそふにまかせて、彼岸の榮華を羨むにしもあらず。只、活ける歷史をたづね、ものいふ書を見て、まだしき道のたすけともなさばやと、山口なるふる里を辭して、こたび平安京のあなた、近江なる彦根といふ處に來りぬ。さゝ波や志賀の都のおもかげを、忍ぶるとにはあらねど、瀰漫たる湖上の秋の月も、ふるさとゝはやうかはりて、趣なきにあらず。但し訪ふ人もなき旅宿の二階には、ひとり住みのものさびしく、嘯風弄月の餘韵はものかは。出すべき消息さへ筆取るに物うくて、讀むべき一卷の書物だに、荷物遲延に遮られ、朝夕の友とすべき者もなし。いでや旅寢の見聞を、一つ二つ物してむ。

○我が兒は學士●●●●●

一小世界の汽車のうち、變化極りなき出入の人、窓外の眺望すでに飽きて、物云はまほしう、物きかまほしう、物くう人、欠伸する人、居眠る人、とり〳〵なる中に、中學の制帽制服を着たる人、余の向ひにありしが、先づ余に向つて、言をかけぬ。余は、只、その問ひに答へしのみにて、再び云はざりき。されども、談話の動機は、これより開かれぬ。余は默して、之れらの人の應答を聞けり。之の中學敎師は美濃の人にて、徃年の震災にあひ、家族全滅のうちに、一人辛うじて免れしものあるよしを語りて、當時の慘狀を語ること目擊するが如し。人皆耳を傾くる時、物識り貌なる一老婆あり。東京に歸る者ありとて、尋ねもせぬに橫鎗を入れ、君は某博士を知れりや、彼は悴の知人なり。彼の博士は、當時の震災を目擊し給へり。仝博士は、大學敎授におはせし時、悴はお世話になりぬ。此頃、京都に居給ふ、文學士某氏を知り給へりや。彼も悴の友人なり。わたくしは、東京

何處の者にて商家なれども、悴は大學に入れぬ。など人の問答を捉へて、問題外に移りて、頻りに悴の吹聽に鼻うごめかすを、彼の中學教師、つら惡しとやおもひけむ、返事をもせで、他の人と語らふを、老婆は勢拔けしが、なほ懲りもせず、再び口を出して、またく\、悴も工學をやりまして、今は、お陰さまで工學士ですけども、といふを彼の教師も他の人も、顔そむけて答をもせざりしには、老婆も、さすが拍子ぬけしたるは笑止なりき。淺きかな婦女の量、とかく、少し我子のありいづるに鼻高くして、人の爪彈を受くるぞかし。

○君は因循もの

彥根の地たるや、湖畔の景はさる事ながら、風土水質のあしきこと無比なり。交通機關の便あるに係はらず、產物其の他の財源に乏しければ、風流三昧の徒を除くの外、他府縣人の入りくる者稀なれば、土地は、刺戟といふ良劑に欠けたり。されば、競爭進取の氣象乏しく、只、盲目的に舊來の慣習を墨守することは、京都人に似たり。言語は、京阪を標準とするやうなれど、擧動と共に、大に野鄙なり。されば、琴などをはじめ、我雅樂を弄ぶ者比較的に多かれど、決して、趣味を解して然るに非ず。只猿の狂言に過ぎず。旅宿の前に、母子相住む者あり。母は四十、娘は十九、夜に入れば、直ちに琴かきならして、後には、母の三絃と合奏す。暫くすると、男女の笑聲大に起りて、安眠をさへ破るに至る。あゝ、これ厭ふべき男女の集會所ならむとは。かくては、秋の月に澄みゆく音とも、聞きなされず。品下れる手にかゝりては、いかなる物の音も高尚とは聞えず。物皆然り。材良は、使用者の善惡に依つて決せらるゝ者なり。かく記すをりから、また笑聲の起るを聞く。

筋向ひの家も、亦雅樂を敎ふる人あり。夜に入ると仝時に、その妻なる者聲高く、聞くに得堪へぬ事など、いひ散す騒しさ。これも、仝じく沒趣味の甚しき徒なり。すべて、かゝる者のみ多かるに、余は、日曜などは、便所に立つ外は二階を下らず。宿の婆々評して曰く、あなたは、隨分隱氣な人なりと。嗚呼隱氣々々、土地の人が余を許せる、余は實に奇拔なる適評を得たりけりと思ひぬ。呵々

○名山大川對偉人志操●●●●●●

古人が、名山大川偉人を生ず、など云ひしは、大に、今日の青年をして、怠惰ならしむる憾なきを得ず。名山大川豈に偉人を生ずる者ならむや。偉人は、敎育に依つて得らるべく、刺戟に依つて得らるべく、勤勉に依つて得らるべし。未だ、名山大川といふ、自然の趣味を解する事能はざる少年子弟が、歴史上に著はれたる地に棲むときは、自分は、生れながら詩人の血統と、天性とを供へたるかの如くに思ひなし、その弊や、凝つて、韵事章句の鎖末なる事にのみ耽り、進取の氣象、實用の才を展ぶるに、疎くなる者多きが如し。抑も、名山大川と云ふことは、大概、他郷の詩客が來りて、之を歌ひしに著はれ、慣れたる土地の人によつて知らるるは稀なり。人より譽めたてられ、始めて氣付き、まことに、おのれは、山水秀麗の地に生れし、偉人の性格ありきなど思ひ、山紫水明とか、名山大澤とかいふ事のみの詮索をなし、古人が、舊思想の糟粕の上には、一歩も出づる事能はざる者、地方に依つて、よくある事なり。嗚呼この益もなき高慢的仙人的思想は、實に國民の進取、勤勉、建設の膨脹的思想を、萎縮阻害せしむる者といふべし。近江人士、此の病あるか否乎。

（以下次號）

苦藥一服（一）

吾水生

●恭謹は、内外に在るを問はず。女子の最も固持せざるべからざる條件なり。然るに、漫歩通學の際、屢、饒舌を弄して、聞くもいま〳〵しき言語を吐き、また、見るに堪へざるの擧動をなすものあり。事、小に似たりと雖も、風敎上に關する大問題なり。宜しく、昔時の女子敎育に鑑み、愼むで可也。

●進歩を意味する改良衣服や、大に善し。單に、歐化するに止らば非也。近來、間々、殆ど洋服と同一なる改良服を着する女學生を見る。腰大肥足、實に優美を缺く。實用いかむは茲にいはず、たゞ、此の點よりいふも、速に、止めしめざる可らず。

●諸孃は、師の言を、絶對的に信せられたまうべし。然らずんば、敎育の實擧らざらむ。然れども、之によりて、實驗に富める父母等の言を、無知頑迷なりとして、等閑に付するは、甚だしき誤りなり。大に、省慮熟考を要す。

●德操は、女子の第一尊ぶべきもの、學藝は、第二に位す。而して、いかに學藝あるも、その能に誇らば、殆ど本體たる德操を滅却せるものといふも、敢て誣言にあらじ。いま一歩をゆづりて、いふも、既にある一部だけは、たしかに失ふ者あり。況むや、おのれさしたる學藝なくして、之を衒はむとするに於てをや。

●婦人は已を愛する人の爲にその容を飾るとかや。外形を飾るは、もとより、或場合には必要なり。日常こと〴〵しく粉飾し、不用の指輪をはめ、綉衣にまとはるゝは、たとへ、餘財ありとも、必ずしも可なるにあらず。否、かへりてまづは贅澤なり。

奢侈なり。併し、是等は、その分限、地位などの異るによる事多ければ、一概に早斷すべからずと雖も、一般には、清潔優美にして端正ならば、木綿にて十分なり。強ひて白粉を抹せずとも、自然の所に、むしろ趣味あり。決して、指輪なくとも、美の點の不足あるにあらず。みだりに、外裝を競ひ、之に耽るは、まことに不可也。殊に、其の分を超えてまでも、外裝を飾らむとするは、愈不可也。節儉は女德の第一義にして、質素而も浪費を省くの謂にあらずや。

●紫式部と清少納言とは、ともに平安朝に傑出せる閨秀なり。されど、その何れがまされりや、と問ふ人あらば、われは、女性たるの點より見れば、將に前者を推さゞるを得ず。すべて、をこがましくもさしいでたらむよりも、耻かしくつゝまし氣なる所に無限の價値あるが故なり。後者をはしたなめむとするは、俗に、云謂生意氣お轉婆なればなり。お轉婆は、輕躁、浮薄、多言を同義にして、而して、貞淑、温良、恭敬と背反せり。この種に屬する女子少なからず。即ち、多くの清少納言ありて紫式部の如きは稀なり。もとより、その性質に基因すれども、教育は、この弊風を矯めて、高尚なる品性を得せしめざるべからず。あはれ、今日の教育は、果して、この最高目的にむかつて、極力傾心しつゝある乎。はた、事實に於てこれを助長する傾向あるに非ざる乎。かくて、被教育者は、恭敬に留心して、この弊風をさけて、高尚の域に進行せんとする勇氣ある乎。父兄は、是等を放擲して毫も顧みざる者大部分を占むるにあらざる乎。

●わが心を律するものは萬事を整理するや明かなり。而して心を律せむには殊に注意を要す。世に、

注意ありて總てを投遣りにする人なかるべし。近頃客ありていはるゝやう、學問せむ人は、實地に當りて仕事又は學校器具等を全く放任する傾きあり。われ一人の女學生を置きけるに、學校より歸るや、直に、復習下調と稱し、袴も、衣服も、下駄も、其の儘にて、自分の室には、多くの器具周邊に散亂せり。されば、これを度々注意するも、なかなかに止みがたかりしと。若し、これにして事實ならば、いかにも理ある事なれど、如斯は、實に有數なるべしとて打過しつ。其の後、またさる所より、同じく多くの非難を聞きぬ。あゝ諸嬢にしてかゝる事はなかるまじけれど、その攻撃にして果して信あらば、たゞに大なる不名譽なるのみならず、學問せらるゝために、かへりて弊害を生じたとは、いかにも口惜しき限ならずや。すべて、女子は、細事にまで注意せらるゝ性質を有すれば、各自皆物事に注意し、よく整理して、その聲の讃美とならむやうにせられざるべからず。極言すれば、修身科は何の必要ありて、學ぶものかを自覺せずんばあるべからざるなり。

教の庭

十一月五日兼題

船中時雨

天　本郷區駒込千駄木町百八十九　荒井千代子

たびころもなれぬふなぢの夕しぐれ
ふるさとびとをおもひいでつゝ

評　船中の情よくいひつくしたり

地　神戸市南逆瀬川町中澤利介方　佐野たま子

ふりそゝくしくれいとひてあま小船
和田のかさまつさしいそくらん

評　詞たくみにして力あり

人

伊豫國松山市米廣町二丁目重原方　岩田春子

波のほにのこるゆふひもうちみたれ
ふなまとくらくしくれふりきぬ

評　實景まのあたり見ろこゝちす

甲之部

肥後　溝口貞子

船やかたとまうちおほふひまもなく
しはしくれてはるるしのやま

河内　岡田美貴子

かたるへきともゝなきさの泊りふね
ゆふくれさむくしくれふるなり

神戸　中澤とし子

夕日かけま帆にのこしておほふねの
ゆらの戸わたるむらしくれかな

乙之部

岩田なれ子

きしよらんかけもなきさにこく舟を
いかにせよとかしくれふるらん

川村はな子

ふな人かとまふくひまにいそやまの
しぐれなかせそさそひ來にける

ゆくりなく時雨にあひてなきさこく
あまのたふれのとまもとむなり　小川つた子

このゆふへしくれふるなりた舟こく
あまかころもやぬれまさるらむ　三宅いは子

みなれ棹さしていそけとふなひとの
またそてぬらすむらしくれかな　菊地かれ子

宇治山のふもとのさとたしくれゆく
くもにおくれてきたるかはふね　荒野たに子

まつにふくうらかせさねて夜網ひく
あまの小ふねにふるしくれかな　梯たけ子

おきさけて船こきゆけはわひしくも
なみかせあれてしくれふるなり　岡田まち子

こよろきのいそやまゝつに音たてゝ
ふなちわひしくしくれふるなり　後藤のふ子

あまのこか釣するふねにこゝろなく
またもふりくるむらしくれかな　生駒春子

ひとむらの雲のなみよりかせたちて
しくれにぬるゝうしのふなひと　永田ます子

きぬかはにあゆつる舟そさわくなり
つくはおろしにむらしくれして　吾妻ちか子

水なれ棹さらてもぬるゝふなひとの
そてもしとゝにしくれふりきぬ　内田とく子

丙之部

しかの浦いつる間もなくしくれきて
しつこゝろなきあまのつりふね　川村松子

うき雲のわりなくかゝるむらしくれ　鍋田よし子

つりするふねやうちさわぐらむ

山もうみも小くらくなりてふるしくれ
なくさめもなきふれのうちかな　杉浦いと子

舟よするきしへもくらきゆふまくれ
なみ路さひしくふるしくれかな　宮田けい子

きし遠くはなれ小ふねにつりたれし
我かころも手にしくれ降るなり　柴田のぶ子

芝うらにつりするふねのいそきつゝ
きし邊にかへるゆふしくれかな　丸城さなり子

まつかせの音にまかへるはつしくれ
すきゆくふねにつきはさしけり　秋岡れつ子

沖つかせふくかと見れはゆふしくれ
ふなまとぬれてあはれましけり　村上友代子

むらしくれ晴間にふねをこきゆけは
四方のけしきもあはれなりけり　佐藤わき子

まつかせの音かときけはこきめくる
ふなまとたゝくしくれなりけり　安藤ひさ子

たまくしけ二見かうらのつりふねの
とまぬらしけるゆふしくれかな　中村りき子

うなはらをさまよひわたるすてを舟
あはれをそふるゆふしくれかな　加藤きさ子

船うけてあそふなみ間のゆふしくれ
あはれをそふるきしのまつかせ　清水てふ子

つりふねにさひしくもふる夕しくれ
ほすひまもなくそてをぬらしつ　吉川なか子

木からしのふくかときけは船ひとは
しくれふるとてとまたつぬなり　村田とみ子

伊勢のうみに小舟うかへてこき行けは
おきかきくれてしくれふるなり　岡井おい

船うけてうらへにあそふなりしもあれ
ひとむらしくれふりそめにけり　須佐きん子

もろひとの中こきめくるふなあそひ
わひしくもふるむらしくれかな　小高しつ子

さをさして行くやみとりのまつしまに
しくれにあひてころもぬらしつ　鴻巣とし子

たゝよへる海士の小ふねにわひしくも
ぬらしてすくるゆふしくれかな　木村とみ子

敷津の浦いそ邊に日かけさしなから
こき出て見れはしくれふるなり　赤尾かつ子

ゆふまくれあはれをそへてわたつ海の
おきこくふねにしくれふるなり　高地こう子

かきくらしゝくれすくとてひな人の
あはたゝしくもとまもとむなり　金井ゐき子

もみち葉をちらすしくれにふな人の
ころも手ぬれてあはれなりけり　關口きせ子

まつかせの音かときけはくもたちて
小ふねにそゝくゆふしくれかな　宮武でる子

むらしくれふりくるおきのゆふまくれ
とまもふきあへぬ海士のつり舟　大久保伊野子

さらぬたにわひしき物を海士のこく
おきの小ふねにしくれ降るなり　森脇さへ子

むらしくれふりしくまゝにあま人は
とまふきあへすそてぬらしけり　國府田はる子

まつかせの音かときけはこきめくる　篠塚しげ子

歎の庭

ふれのとまうつじくれなりけり

つり舟にとまやふかましあらいその
まつかせさむくしくれふるなり　正木たゞゑ子

うたあさる海人も家路やいそくらむ
小しまかいそにしくれふりきぬ　金田とみ子

あらしふく音かときけははつしくれ
おきこくふれのとまぬらしけり　濱口ころく子

あま小舟いそへをさしていそくなり
おきはしくれやうちしきるらし　山本よし子

神無つきおきへはるかにふれうけて
つりするそてにしくれふるなり　柏木はるゐ子

くも間もるつきのひかりをよすかにて
ふれこくおきにしくれふるなり　足立幸子

たえ間なく波のよせくるわかふれは
ふるしくれにそぬれまさりける　堀内ふさ子

さらぬたにぬるゝを舟のむらしくれ
ひときはつよくうちしきりけり　林みほの子

あはれわかふるさとさしてこく舟に
ひとむらしくれふりしきるなり　今井溱子

おもふとちはせつらんとて船こけは
ふりくるじくれそてぬらしけり　永井あき子

まつじまのけしき見むとてこく舟に
なり〱そゝくむらしくれかな　鷹山みゑ子

潮氣ふれのわけゆく波におとそへて
あられましりにしくれふるなり　田代しか子

ふるさとの夢をやふりて小夜しくれ
なふれにそゝくおとのさひしさ　田代艶子

遠やまにゆふ日のかけはみねなから
おきゆくふれにふるしくれかな　山田いれ子

とまもなくもみちみむとて出し舟に
にはかにもふるむらしくれかな　山田よれ子

はれまなきしくれに袖やしほるらん
ゆくふなひとのとまおほふとも　椎野秀子

はれくもるゆふへの空をなかめつゝ
しくれになやむおきつふなひと　椎野しけ子

いかにせんとりおほふへき苫もなき
わかふれにしもしくれ降るなり　田村多豆子

雪ならはつもらむものをふれのうへに
まなくときなくしくれふるなり　村上操子

いさ船子とまとりおほへかのしまに
かゝれるくもはしくれなりけり　上原のふ子

たけしはの沖にこきよるつりふれに
ゆふ日さしつゝふるしくれかな　佐野きやう子

こきかへすひまもあらせす浦まわき
またひとしきりしくれふりきぬ　福原菫子

ふらぬまとこゝろいられて棹させは
ひとむらしくれはやもすきけり　武田龜子

舟ひとのなれてさすてもまとふまて
かせふきすさひしくれふるなり　鏡山増代子

みなれ棹さしもいそけとしくれくる
おくれてぬるゝよとのかわふれ　衣笠澄子

うちよするなみの音かとおもふ間に
ふな路をくらくしくれふるなり　田代綾子

ふなはたをたゝく波さへかなしきを　飯村むき子

さらぬたにたゝかしの實の一葉ふれ
またそてぬらすむらしぐれかな　名木山勝子

宇治かはやあさ日の山も日くろらし
なみおとたかくしくれふるなり　穂積稔子

さらでしも佗しきものをわたつみの
くたすをふれにくものきそへろ　松尾せい子

ものおもふゆふへさひしき船のうちに
なみのうきねにしくれ降るなり　岡田春子

しくれふるゆふへかなしき船のうちに
しくれのおとをきくそわひしき　岡田ひろ子

とつくにをさして樂しきふなちにも
おもひこそやれふるさとのそら　荒井滿武子

とまりふね夢のまくらにおとたてゝ
しくれふる日はころもぬれつゝ　荒井幾久子

まほかけてこきゆく船にしくれして
しくれふりつゝいとゝさひしき　服部倫子

風あれしやまさきあたりくもはれて
あきのあはれそいやまさりける　德永萬諒子

をちこちのもみちを見つゝこくふねに
しくれにまよふよとのかはふね　德永廣子

苫ふけはしくれはよそにはれにけり
うたてふりくろむらしくれかな　佐々小學子

黒けふりぶきてはせいつるおほふねに
みしまにかよふあまのつりふね　佐々有鄰子

ふるさとへかへさをいそくゆふくれの
おひすかひてもふるしくれかな　小川たき子

ふな路さひしくふるしくれかな

高根には日はさしながらつれなくも
こき行くふねにしくれふるなり　増戸そで子

さらぬたにわたるふなちの悲しきに
そらかきくらししくれふるなり　春野厚子

からさきの松のしくれをよそにみて
やはせをさしていそくふなびと　宮井里子

いかにせむしくれ降りきで苫ふけと
なほそてぬらすふれのうちかな　藤本蔦子

川きしにふれこきよせてやすらへは
もみちゝらじてしくれふりきぬ　中舘やう子

ふれはてしひらのとまりの小夜風に
たねすしくれのとまたゝくなり　山本梓子

うなゐ子かそてもしとゝに小舟こく
すみたかわらにしくれふるなり　牛山素子

神無つきうなはらとなくふれこけは
しくれふりきぬとまもなくして　川中子てつ子

さして行くみなとは遠しなにはかた
ふなまとさむくしくれふるなり　関勝子

けふもまたしくれふるらしもやひふれ
うちてのはまをいてそわつらふ　柳田益子

うな原やかせをたよりにゆくふれの
とまもふきあへすしくれふるなり　筑紫春子

なみまくらゆめやすからぬ小夜中に
しほかせましりふるしくれかな　松村あさ子

ひとしくれはるゝもまたてはりま潟
おき邊はるかにこふれこくなり　瀬戸ゑい子

さゝ波や比良のねおろしかきくれて　横田音羽子

矢はせの舟にしくれふるなり

よとかはをわたる船ひとけふもまた
しくれのあめにそてぬらすらむ　青木たま子

たけ芝やはせつるふれのかへりくる
つくたのわたりしくれふるなり　横内秋子

ゆきめくるひとむら雲にしくれきて
海士のたもとやぬれまさるらん　戸塚てつ子

おき遠くおひかせうけてゆくと見し
ふれにしくれのふりかゝるかな　平尾あさ子

宇治川をしはつみわたるふれのうへに
もみ葉と共にふるしくれかな　片山あや子

小夜ふかく比良の根おろし音たねて
しくれそほふるふれのうちかな　片山ふみ子

歸りにはほをやれにしてつりぶれの
あきのしくれをよけつゝそゆく　永井しめ子

おほよとのかは瀬のうきね興さめて
さひしくもきくむらしくれかな　北島功子

おとたてゝしくれ降りきぬ舟ひとの
なかはくちたるすけの小かさに　北島操子

梶まくらまとろむゆめのなかたねて
ふちせもわかすしくれふるなり　山田ふみ子

はれ曇るしくれはけふそあきはてぬ
つなてもなかきよとかはのふれ　早川たね子

しまかけに立かくれむとかちとれは
ふれよりはやくしくれゆきたり　三宅中枝子

しくれにはぬれてもよしや海士ちは
あまの小ふれにあまりあるまで　河合ぬひ子

ゆふ日さすせたの長はしよそにみて
しくれにいそく矢はせふれかな　服部萬子

ぬれしとてしくれにかへる舟よりは
はやくはれゆくかせはやのうら　服部正子

淀かはにふれこきいてゝこひつれは
そてはしくれにぬれてけるかな　本多きさ子

こき出んとすれは又もやめくり來て
しまやまかけにふるしくれかな　永井さい子

十一月五日兼題

菊

天　大阪市東區平野町三丁目　桝田益子

春秋に、花といふ花の、多かる中にも、在五の君の秋なき時やと、愛で給ひし此の薫りよ。其の姿さへいひしらず、いみじう哀深しや。その上ふるき世に某のみかどの、あたら其の香をと、時たのあめのあはれをかけそめ給しより、久方の雲の上には、天つ星と輝き、秋風の吹上の濱には、波のよするにまがひ、霜をさゝへしきせ綿には、老をかくし、ぬれてほす山路の露には、ちとせ經ぬなど。いともめでたきからに、花やぎたる御わたりの、あやの

み袖にくゆりて、菊合、はた、何くれの御遊に、數まへもて輿せらるゝのみならず、すはまに造りては、御座近く、藥玉によそひては、御凡帳の内まで薫れり。某の卿は、いみじうめでての餘りに、住なし給ふ殿を、菊亭となんよび給ひ、それがしの武士は、菊川の驛に伺時を偲びて、此の流を汲みしはいふも更なり、九重の御庭よりあやしき賤が垣根まで、大方ならずおひ廣ごりて、露のなさけをかけぬくまなく、世にもてはやさるゝにいたりしは、菊にまさる花あらめや。唐にも、抱朴子はそが苗を朝夕のあはせ物にたうべ、花を小瓶の酒にひたして呑つゝ、玉きはる命を延すと味ひ、仙人の書に、延壽の客といひ、玉龜齡の言に、冷香と唱したり。周茂叔は退隱の花と賞し、陶淵の君は、薫りをひんがしの籬に愛で、梅村老泉のから歌には、花の瘦せたるをあはれみ、はた、菊よりも清しと、しらべたり。酈縣の流れ、甘谷の下水皆病をいやし、壽をのべ、費長房は、菊もてかもせる酒に、まがことの醉をさまし、屈平の垣内は、黄金滿ちぬとうたひしなど、かゝる、古事をかきつらねなば、筆の毛も、そこねつべく、咲花の種類いろいろあるべし。こと國より渡り來し草木の中にも、是のみぞいとも、めでたきものなれば、いはまくもかしこき御あたりの、みしるしとさへなさせ給ひしは、世にありがたき花のおもておこしの極みになん。名を菊といふは、舌こわくきこゆれば、百夜草、翁草、千代草、契り草、など其の外、さま〴〵によぶ人もあなれど、唐の根ざしなれば、字のまゝなるこそ花のほいならめ。柴のかたちに似かよひぬとて、あらぬ名おふせんは、やうなきいひ草にこそあれ。あばれげにをかしきは此の菊なりけり。

久方の雲井の庭に品たかく
かをりたふとし白菊の花

地

井上八重子

桔梗をみなへしなど、やう〳〵うらかれゆくなかより一人色も香も、ゆかしうさきいづるものは、菊にこそあれ。このはなのきなる、白なる、さま〴〵ぞ、色香ふかくさきいでたる風情は、またなくかしきものにゆぞある。あはれもつらしのいにしへにては、山ふかうこもりゐて、菊の下つゆに、千代のよはひをのべたる仙人もありきとかや。わが國にても、そのかみより、このはなを千代のためしにひきなして、うたにも、

ふみにも、よみたゝへしものかず多ければ、いとゞめでたきものとこそおもはるれ。わが身も、このはなをことよなくなつかしうおもへれは、おほつかなくも、はかなき庭におふしたてて、朝な夕なにつちかひて、おこたりなく心つくしのかひありて、きのふけふは、やつゝぼみの見え初めつれば、また、かりのほどには、日ごろおなじ心あるともがきたれかれを打つどへて、花のもとにむしろひきつらねいにしへ人のこゝろにことよせてうたよみかはさんには、かれにも、又、一しほの香やそはせむと、いと樂のしくまたれつゝ。

人

柏木はるえ子

四つの時咲きいづる種々の花の多かるが、そのをりをりにつけておのがじゝ、其の形風情の異なるこそをかしけれ。秋の花には、ことに、菊をぞとりいてつべかりける。秋ふかく、まねく薄にも戯はず、ふく野分にもおそれず。露霜の中にゆかしき操をもて、咲き匂ふなどは、かの元弘の昔、世は秋草の亂たれし如き中に、楠公の清き誠をもて、世に盡し給ひし功にもおもひよせつべし。今は、四つの海浪風立たぬ御代にて、このかぐはしき菊の香りも、一しほゆたかなれば、この花の操を世のをとめ子が、心ともならばとなんおぼゆる。

（以下原稿到着順）

名木山勝子

夕月の匂ひけるなり、野もせになりたちて、めでにし糸萩は、いつのまにか、あはれ散りしきし。やさしき姿よと歌ひし女郎花は、はやもしぼみぬ。あはれゆかしの尾花が袖も、つれなき野分に打ち破られて、清き虫の音やそもいづこ。今なん秋は、またくあはれのさまとなりにけるよ。

あまりの淋しさに、はらく〳〵さ、幾ひらか木の葉の音なひし破れ机、そがまゝさしおきて、垣根の邊りさまよへは、あなこゝにこそ、めでたき花は咲き出でたれ。ゆくりなくも、あはれ嬉しやな。あるは高う、あるは低う開けるも、蕾めるもありて、氣高き姿よ。此の菊といふものゝ、他にやはあなる。破間よりさし出でたるも宜し。あな嬉しき花や。我が荒庭ならで、神の造りませる自然の園に、野菊とかやいへるが、おのづからに、しのすゝきのはかなき秋にすがりたる、あるは、谿間に匂へるなども、いと〳〵愛らしう、いさゝに川のほとり咲きいでゝ、姿うつさるも、又なく覺ゆめり。とかく何にまれ、自然の姿こそ、なか〳〵にらうたけれ。さるを都のほとり菊造りなどいふ者の、殊更に枝撓め、丈揃へなどしたるは、あまりにこちたくて、まことや花の品位なきづゝけ、唯々輪など大きうし、あてやかにのみなさんとするは、人になさば、あだかもわざをぎの如き様みゐて、いと〳〵見おとりのせらるゝものにこそ。さはれ、小さき土橋の上など、白う霜おきたるあしたにも、はかなき露結びたる夕べにも、なよびかなるさまの、いさゝかも撓ま

てかなれるは、ひとり此菊のみよ。淋しき野邊に殘りて、いと操正しき花にぞある。あはれ〳〵心なし草花だに、猶かゝるめでたき行のあるなや。いかで我等は、勉め勵みて、心の花なつちかひ育くみつゝ、聖の世にさく菊の花、それよりもたちまさりて、かならでやは。萬物の長とかやほこれるな。あはれ。

北島功子

去年よりかりそめに培かひてし、ませの白きく、此の神無月ばかり、一本二本薫り、たゞならず咲きいでけり。いとゞ哀れに、愛らしくおぼゆるからに、まつわれる蓬が根どもかき拂ひ、垣ほの破れめなんとかひつくろひやれば、日毎になかしくものびゆくもの哉。朝露の光いと清げに、おきまどはせる霜のおもしろさにも、露おとろへたらん色も見ねず、さらにおもむきなそへて氣高く、いよゝ、神々しさも立ちまさりゆきにける。實にや菊は、よろづの花のとぢめに、露霜な凌ぎてさきいで、千代もふりせぬためし、いとゞめでたしとも尊しや。さるからに、昔より山人は、かぎりなき風流の友といひ傳へて、千代に愛でもて稱ねけんときくも、うべにことはりにこそ。

露霜に色香おこれるしらきくや
千代もふりせぬ花はこのはな

など、獨りごたれてなむ。

關靜子

そも〳〵此の菊よ。如何なる長所のあれは、かく多くの人に愛てはやさるゝならむ。その花の美しきか故か、その香の香しきか故か、あらす〳〵。美しき花、香はしきかほりもさる事ながら、秋も、やう〳〵たけなはならんとする時に咲き出で、やゝ、しつみゆかんとせる諸人の心なして、再ひ樂しましめ。あるは、千代の坂のほらんとすめる、老人の友とちとなり、あるは、操正しからさる人の、教草となるなど、かぞふれば、かず限りなかるべし。まことや、月明き夜などに、露はさながら風にはらはせて、獨そのくしき影と、面くらべしたる、たとへんものもなくおかしかりけり。あなゆかしの白菊や。あなたうとの菊の操や。

生駒治子

庭の片すみなる菊の一本、二つ三つの蕾持てるが、日なふるまゝにいと大きうなりて、漸く、今朝は咲き揃ひぬ。いづれな君臣と名付んか、いとわづらはし。そゝ、秋の花としいへは、かず多き者なるに、此の花の如く、姿、色香共に、一きはすくれて、氣高き者はなし。さるゆへに、世の人には、花の王とほめはやさるゝもむべなるかな。秋もやゝ野分立ちて、千草にすだく虫の音も、わが宿と共に、はかなくかれはてゝ、いとゝあはれな深むる折から、ひとり此のはなのみ美しく咲きいでゝ、此頃の人の心な、慰め顔なるこそやさしけれ。されば、あやにかしこき雲井の上の御しるしも、此の花もて形取らせ給ひ、花の面目此の上やあるべき。又下りては、忠と義とに名も芳はしき、楠公の紋も是にてせられたり。或は、目出度事などには、此のはなな用ひざる事なし。あゝ花にもかゝる幸な持てり。是れ、已が正しき操な守り、ふきすさぶ木枯らしにもたゆます、霜の夜などもよくたへしのき、さま〴〵の憂きめなへて、咲出たればこそ、人々にもてはやさるゝなれ。されば、人たらむものは、學ななさめ、業なはげみて、たゞしき道なふみ行き、此の花の如く、名な千載ののちまでものこしたき事にこそ。

椎野秀子

野分ふきわたり、千草もやう〳〵うらかれて、荒れたる前栽に、ひとりおくれて匂ふ菊はかり、あはれにゆかしきものはあらじかし。清き其の香、けだかき姿はさらなり、霜にかじけず時雨にうつ

ろはず、冬深くまで咲きのこりたる色香のほどは、いつれの花か及ふべき。まして、ひと年の花のとぢめと思へは殊更に、惜まるる心地して、あはれさもまさりけり。もろこしの某がしも、此の花を、四君子の一とめて、又、この花の、世になく盛り久しきをめでて、千代の齢ひを壽き、あるひは、菊の下水をむすへは老ひも若ゆと、もてはやすこそ、いと〳〵めでたけれ。わか庭に、さきつころよりあけくれしたてたる菊の、このころ咲きいでたる、なか〳〵にうつくしければ、露よりさきに起きいでゝ、ながむるも、心の友と契るになん。

佐々有鄰子

秋風に、みだれみだるゝ七草の花は、露霜のおくにまかせて、色あせかゝりぬれども、露もいとはず、霜のまがきに、いろふかききせ綿つけたる、黄菊白菊の研をあらそへるさま、こもいはれぬ姿を。朝庭に出みれば、唐人の、むかし、隱逸なるものとめではやしつるも、うべなりけれと、うめき出ぬる歌。

朝露のまがきの菊の花みれば
もろこし人のこゝろしそおもふ

と、くりかへすなりから、軒の雀のこゑうるはしく、秋のみのりの豊なる、里のにぎはひ千代〳〵と、紅塵に交りぬ。山住の情をなぐさめかほなるも、をりからのあはれを一入そへて、菊の花ぶさふさやかに、紫ふかくにほへる露、したたるばかりになん。

松尾せい子

秋もやゝ〳〵深くなりて、錦織りなしたる千草、皆かれはてたるに、籬の菊の咲き出でたるは、いとうれし。芳ばしき香、朝風に薫りたるほとりにたゝずめば、仙人の住家にいたりたる心地せらるゝは、おのがせまき心からにや。花のむき〳〵たてる姿の、清らかに品高く、霜露にうつろはぬ操のすぐれたるは、花のおとゞとたゝへらるゝも、ことわりぞかし。九重の御垣の内より、貴人の御園、こゝの壇、かしこの庭にもめで植ゑられて、色は更なり、形の異りたるなど、かぞふべくもあらず。培養の丹精によりて、千代の色さへ、いよ〳〵深くなりぬとか。露ふかき野邊の細道、あるは、谷川の岸にみだれ咲けるは、培ふ人のありとしもおぼねぬに、あはれ、なつかしき花の心かな。

飯村あき

庭の千草も虫の音もかれて、さみしくなり行く今日此頃、まがきかもとに生ひ出し白菊、いとこゝろたかう、霜の後に匂しほます。松ヶ枝とともに、のこりのよはひも、ゆたかになん。されは、これか露をのみて、仙人の千代へにけるも、うべなるかな。さはあれと、人の世にはかひなきか、此の菊こそ巳が身には、なか〳〵につらくも、又かなし。あはれ、母君の菊を愛で給ひて、いと多くおかしきをあつめ給ひ、朝に夕に、養ひ給へるが、去年より、かのまがきに咲き出てし白菊こそ、いとうれしう、さるか上、作人の手にだにふれず、自然なるまゝの様は、一きは心地よし。あはれ、今年も又生じければ、いと心して、よき花さけかしと、ひたすらねがひ給ひしかひありて、早、豆程のつぼみをもちたる頃より、母君のいたつきになやみ給ひ、虫の音とともに、遂にかへらずなり給ひぬ。されと、菊は、なほつぼみにてありけるが、今、やう〳〵咲きそめたるこそ、あはれ、花は去年に變られど、母君は、いづこに、このうるはしきすがたを見給へるにや。

福原直子

秋草のあまたが中にも、あはれにいとゞめでたきは、春より心して、土かひ植ゑ立てし、まがきに咲ける菊の花になん。霜にもやつれず、時雨にもうつろはず、白金、あるは黄金と、おのがじゝさきにほひたる様、實に、玉の緒の千歳延びなん心地せられて、床

しくもめざましさ限りなければ、やをら庭に折り立て、その氣高き、松におとらぬみさをのほどめでばやと、一枝とれば、花もはねある心地やしけん。一きは高く、袖にかほるぞ、うれしき。

近藤琴治

草花のいと多かるが中に、とり分けて、愛でたくも床しきは、菊の花にこそ。秋の野に色香きそひし千草の花も、やう〳〵にしわ枯れて、眺の淋しき頃、姿清くも、能く露霜にたへて、芳しく香ひ出づる雄々しさ、實に古人の花の君子とたゞへけるも、宜なりけり。まして、よになく盛り久しき花なれば、長こき御あたりの御しるしにせさせ給ふこそ、たぐひなく尊とけれ。あはれ、人にして菊にだもをとらめやは。

梯たけ子

今は盛になりたればとて、さる方よりおくり來りしこの菊、小瓶にさしはさみてよりも、日かずはうつりしかど、猶色美しう、香もあたりにみちわたりて、いともゆかしううちむかへれて、あくべき時なきは、げに千代も經といふ花のしるしにやありけむ、いにしへも今もかはらず、やんごとなき雲の上人にもかざゝれ、片山里の賤が身にまで、こよなきものともてはやさるゝは、かく盛の久しくめでたき花なればなりけり。あはれ、秋のさかり過ぬれば、うつろひゆく大方の草花にはならはで、只獨り、霜おきての後はいよゝけだかき姿をあらはして、かの緑ふかき松にも劣らざる操を思へば、いとも〳〵なつかしう、あかぬ心地のせられてなむ。されば此のきくよ。我友ともなりて、とこしへに咲匂へかし。なが心の秋も、ふかき色香も、永く久しく見愛でなむ。

中村磯子

ふかみ草は、花の王とし言ひつれど、其のすがたうるはしきのみにて、いとゞ、かれよりゆかしきは、實におきな草にこそ。世に延壽長命のくすりとか。くれゆく秋のなごりに、ひとりきすぐなる心もて、霜にかじけず。花は多かるなかに、白、あるは、黄なるもうるはしく、落葉をかづくまがきがもとに、ほころびそむる其のすがた、今ひときはあはれになむ。あなかれは、かしこき御あたりのみしるしともなりいてゝ、ひとゝせのうちにて、春は花、秋は菊も御まどひのありとか。實に、九重の御そのに、千代をこめたる根ざしの、一しほかほりゆかしく、咲き出る身のうまびとのかげしにさせ給ふか。あなめでたのかれが身や。

福島なを子

去年の秋、或る知友より我が家へ、いと珍らかなる菊一株贈りおこされ、わが庭へ植へ置きしが、今年も、又、近き頃より大きなる蕾もてるが、色香をかしく咲き出てたり。そも秋草といへば、様々數ある中に、わけて、菊はその形やさしく、色香のゆかしきのみならず、けはひさへいと氣高くして、つゆ亂れたる節なし。さるが上に、菊は、萬の花におくれ、秋もやう〳〵野分たちて、木の葉も散りちりに落ちしきて、野邊の千草も枯れ果てゝ、天つそらには、雁など鳴きわたり、あはれさいはん方なき折柄、ひとり此の花のみ、めでたく匂ひいでゝ、此の頃の人の心をなぐさむるこそ、いと〳〵うれし。さるが中には、世の人のさま〴〵に造りなせる花よりも、自然に生ひたるひと本の、雪かと見まがふばかりの花の色、みどりふかき、葉にうつろひたるに、夕日さへ、いと花やかにさしそひたるさま、又なんとなうあはれなり。かけまくも畏こき雲の上には、この花の十六瓣なるを以て、御紋章となさせ給へり。心なき花も、いかにかしこく思ふらん。又、中輪の花はかの楠公の徽章とせられたり。公が香しき名と共に、此の花の愛でらるゝは、千代萬代にいひつきゆかむ。もろこしの人は、古へより菊の祝に、さかづきをうかべるとかや、あゝ菊にし

て、なほかゝるさちあり。おもふに、これその節操を守り、おのが天眞の勉を怠らざればにやあらむ。まして、人たらんものは、勉めて學を修め、德をみがき、この花にもまさる、香しき心の花を咲かさてやは。

増月そで

いつしかとのみ待ちわたりにし七種の花も、よな／＼ふきすさぶ野分の風にうらかれて、物さびしき庭の面に、しらぎくの籬のもとに、一二輪さき出でゝ、下ゆく水にうつれるすがた、何にかたとへつべき。爰に、まがきのほとりにたちぬれば、かほりゆかしき中に、秋蝶のむれむれるなと、またしもおかしさをそへぬ。かかるさまに、家にはいらんともせでながめ居しに、常に親しき米子の君の來り玉ひて、このたびは、共にながめたりき。實に菊は、人の心を清く、また、よはいをのふると古より、云ひつたへ、「限りなきよはいのみかは見るがらに心をのふる白きくの花」と、おのれ此の花を見て、心も身をもあらためぬ。

依田くに子

野山は、いつしかにしきと變りぬるに、獨り菊のみは、秋知り顔に咲きほこれり。菊は、昔より隱逸の花とも云へば、其の自然にさける所に、氣高きおもむきあり。其の花いと／＼美しく、白きは雪の如く、黃なるは黃金の如くにして、ひとしほの眺めなり。生赤う黃なる柘榴の實より、夕日、かすかにもれおつる影を、さも／＼名殘惜氣に狂ひ居たる蝶、菊を見しやいと喜しげにとび來り、花のほとりを狂ひまはりぬ。いさゝかの風もなしやと思はるゝに、はらりとばかり、其の花びらこぼれたる姿の、いと心地よげなり。秋はいと沈みかちなるに、かくあるを見れば、淋しき心地もわすれんばかりなり。只、美しく裝へのみならで、時しも秋の末なるに、いと美しく咲そめたる其の操の、いといみじう覺ゆるになん。

松澤まつ子

我園のまがきがもとに、菊のにほへ出でゝより、賤が家も、にぎやかになりぬ。白きは白く、紅きは紅く、何れ嬉しき色も香も、うら／＼と昇る朝日に、露をかざしてかゞやきあへたる、朝日と共に昇り行く、みさをの程そあらはれて、雄々しさも、美しさも、一入になん。月の光に、やから打集へて、夕げのぜんに向へたるに園の方よりそよ／＼と吹き來る風に、いひしらぬゆかしき香りおこしたるからに、くみかはしたる酒に、菊はなけれども、菊酒に醉ふたる、心地するも、いと嬉し。世の中のなべての花は、先のみあらそひて、咲き出でゝ少しの露霜にもたへかねて、たちまちおとろへはつるに、此の花のみは、おもむろに、獨り後れて、あさましう成り行く、園をにぎはせ、よく露霜にたへて、久しき間、己がつとめを怠らぬ、いとも／＼目出度は、菊になむ。されば、申すも畏こき御あたりの、御しるしにさへせさせ給ふになん。あはれ、此の花を見ては、後れし身とて何なげかむ、たゆまずはげまば、やがてはにほへ出でなんものを。



樂園

日本畫

下田春興

霞に匂ふ春の花は、いひしらずめでたけれど、雨ふらずうつろひぬべし。夕日輝く秋の紅葉は、たぐひなくうるはしけれど、風ふかずちりぬべし。たゞ水ぐきに匂はせたる、花紅葉こそ、千代も八千代もかはらぬものあれ。さるが中にも、日本畫油繪、さては水彩畫など、差別はあれど、油繪は品やゝくだり、水彩畫はいふべくもあらず。日本繪ばかり、品たかくみやびかなるはあらずなむありける。力をも入れずして天地をも動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武夫の心をも慰むるもの、唯やまと歌のみならむやは。そも／＼日本畫は、何を以ちてか、かれらが上に立てる。目に見る所を、そのまゝに寫すが故か。あらず。此の色彩の、こまやかなるが故か。あらず。太氣の濃淺、光線の配置遠近の距離にも、あまりこゝろをよせずして、單純なる黑白の兩色を用ゐ、陰陽を區分し、獨創自發の史を有すれはなり。目の視る所を寫すがごときは畫のもともをさなき所にして、宇宙自然の神趣を描くこそ、畫の上乘とはいふべけれ。宇宙自然の神趣は、春秋の花紅葉にのみもかぎるべからず。風雨霜雪にも、また神趣あり。花の雨にあやみ、紅葉の風にみだるゝも、また自然の妙趣あり。これをさながらに寫しとゞめて、さま／＼なる人の感情をつなぎとゞむるものは、たゞこの繪畫の

ちからなるべし。

一ふでのすみの匂ひに千萬の
　はなの色香も見するやまとゑ

朝雲暮雲（二）

晴晨

ねられぬまゝ

如何なればかくは物思ふ身ぞ、今夜も、すでに十二時なるべし。かすかにひゞくは、上野の鐘の音ならむ。夜更け、人靜まりたる後のひゞきは、げに物のあはれの、身にしむやうにおぼゆるぞかし。をさなき程より、父母をうしなひて、身ひとつなる我は、早くより物思ひといふことを知りそめて、少年の無邪氣なるべかりし心も、悲哀の感にかきかたされて、夜半の枕をうるほしゝ事も、屢々ありき。我は、實に、樂しかるべかりし少年のころを、夢の如き悲哀の中に過し來て、青年の今、猶心には、痊えがたき傷痍をいだきて、空しく悶ゆるなり。

心強き人は、我がかくいふをは、あまりに女々しとやいふらむ。されど、よく思ひ見よ、感ずるものは心なり。動くものは情なり。感ずると動くと誰がよく之を妨げ得べき。風吹かば、枝必そよがむ。すがかかば、琴必ひゞかむ。そのそよぐ事の多少、そのひゞくことの強弱は、その枝の大と小と、其の糸の細きと太きとに、よりてなり。感ずるを感ぜざれといひ、動くを動かざれといふは、風に枝のそよぐを罵り、すがゝきて、琴のひびかざらむを欲するが如し。感ずべきに感じ、動くべきに動く、何の妨があるべき。我は、むしろあまりに、世人の冷やかに、あはつけき心をさし

て、無情冷血つ、しれものと嘲らむとす。もとより、悲にくつほれてのみあらむには、女々しともいふべし。されど、若し、この悲哀の中に新しき生命をみいだすものあらむには、などて一様に、之を貶すべき。多血多感の性、物に冷なる能はずとて、あながちにすつべきものかは。我は、一夜二夜を物思にわかすことあれど、我はその苦の中に、猶、心をなぐさむべき或物をみとめ得るなり。我がこゝろは、外界の事物にふれて常に、深き感にうたるれど、それやがて、我が血をして、新ならしむべき刺激なり。されば、我は更に之を憾とせざるのみならず、なか〳〵に、多感の性を與へ給ひ、我をして、人生の妙趣を切に感せしめ給ふ事を、天に謝せむとす。

人は、いかに悲哀の中にありても、如何に失意の間にのぞみても、その心に光明を失はざらむ事を心がくべきなり。我が心の中に、安むずるところだにあらば、悲哀の中にも、猶、ゆかしき慰をうべく、失意の間にも、猶、向上の一路の明なるを認めうべきなり。

ねられぬまゝに、さま〴〵のみおもひいでられてやらむ方なし。

物おもふ夜半のまくらに我ひとり
たゞ雨だれの音をきくかな

天津籠城中の鄭夫人（二）

森林生記

鄭領事は、一同を集めて云ふに、

「諸君、今、領事館に居る人々を數へさせたら、婦人と小供を別にして、館員と居留人とで、五十二名あります。勿論、軍人をいれないで、それ

で、此の五十二人を四組に分かち、一組を十三名とし、之れを三時間づゝの交代にて、巡回看護、庶務等の任務に當ることに定めたいと思ふ。そうして、一組だけは、巡番に、休息すると云ふことにしたい、諸君の御意見は如何です。

と云ふと、一同は、無論賛成をして、爾う決したのであるが、巡回は、云ふまでもなく、銃を肩にして、夜となく、日となく、始終怠りなく、領事館の內外を巡つて、警戒を嚴にし、庶務は、糧食其の他の種々なることを取扱ひ、看護は、濱子夫人が先に立ちて、男兒も、其の番に當つた人々が夫人と共に爲すことになつた。それで、其の看護の仕方は、實に信切なもので、負傷者も、氣の毒に思ふと見えて、須磨艦の四等水兵の、郡辰五郞と云ふ傷兵が、

傷兵「如何も奥さん、お氣の毒で厶います。ねい、

我々如きものゝ、汚穢物まで掃除をして、萬事萬端御世話をなすつて下さるとは、我々に取つては眞に有難いですが、併し、定めし御迷惑で厶いませう。

鄭夫人「如何して〳〵、決して迷惑所では厶いません。貴君方は國家のため、御負傷なされた、名譽の負傷者、それを看護するのは、願つても出來ないことで、妾共は、好んでするのですから、決して、氣の毒だなどゝ思召して、御遠慮なさらないが、宜しう厶いますよ。

傷兵「爾う被仰られると、痛み入りますなア。

と云つて、ポツ〳〵難有涙を流して居る。

記者は、昨年の事變の際、從軍致しましたから、これら負傷兵に面して、其の當時のことを、詳しく聞いて見まするに、傷兵等は、左の如く話しました。

「皆さまが、眞に御信切に看護して下さいましたが、就中、濱子夫人は、恰も、痒い所へ、手の屆くやうにおされて下さいまして、吾々は、實に、有難涙を流したことが、度々ムいました。須磨の二等水兵に、泥谷今朝松と云ふ男がありまして、至つて涙脆い性質でしたが、右の手に負傷して居たので、濱子夫人は、自らお粥を煮へて、哺めてやつたら、泥谷は、奥さん、如何も濟ませんと云つて、ポロリ／＼涙を飜して、泣きますので、濱子夫人が、阿君、何故爾うお泣きあさるの、傷が痛みますかと聞くと、泥谷は、日本の兵士は、傷の痛む位に泣きはしません、僕の泣くのは、尊姐方の、御親切に感じて泣くのです。ア丶有難いと、益々涙を飜しますから、其の涙が、粥の中へ墮ちて了います。濱子夫人が、それは、涙が這入つて穢ないから、捨て丶涙の墮ちないのと、取換へませうと云つたら、泥谷は、有難涙、感涙だから、捨てるは勿體ないと云つて、ズル／＼吸つて、喰て了つて、ア丶有難涙は鹽氣があつて、甘いと云つて、喜んだ位ゐでムいます。

と恁う云つて記者に話しましたから、記者も、思はず失笑した位いでありますが、此の負傷者の談話を以て見るも、夫人が、如何に傷者を劬はりて、看護に、身心を勞せしかを知るに足るのである。

時に、獨逸の領事館から、鄭事領へ宛て丶、書面が參りましたから、領事は、直ちに、披見すると、日本の領事館が、一番安全のやうに思はる丶ゆゑ、獨逸の婦人を、日本領事館へ送り込んで、彈藥をも運び、英の工部局と、日本の領事館とを、共に最期の防戦場所と、定めたいと云ふ意味の書面であつた。鄭領事は、暫く考へて居られましたが、

聽て、濱子夫人を呼んで、文面の大意を語り、

領事「如何だろう。日本の婦人ば、英の方へ送つておきながら、其の後へ、獨逸の婦人を入れるとは、些と變ではあるまいか。

濱子夫人「それは、獨逸領事館が、餘程危險に依つて、爾う云つてお寄越になつたで厶いませうから、早速、御承諾なすつてお遣りなされたはうが、好いではありませんか。

鄭領事「爾うじやのう、己もそう思ふじや。之れは無論、承諾してやらなくてはなるまい。

と、領事は、直ぐに、承諾の趣意を認めて、お遣りになりましたが、そこで、獨逸の婦人が來るとすれば、領事館を、成べく奇麗に掃除して置かないと、日本の領事館は、穢ないなど、云はれては、日本の恥辱になりますから、濱子夫人は、自ら先に立ちて、掃除を始めました。男兒の人々も、此の夫人が、雄々しき擧動には、皆、感服致しまして、共に力を添へて行りましたから、忽の中に、二間ばかり、全然掃除が出來て了つた。サア是でモウ、何時獨逸婦人が來ても、決して差支はない、ドイツもコイツも、御出なさいと、なりましたので、濱子も、ホッと一息ついて居る所へ、長らく召使つて居る支那人のボーイ、

胡五

(此處に書いてあるのが、濱子夫人の、記者に話されたとき自ら書かれたボーイの名で、之れが、即ち、夫人の筆跡)と云ふ男が、入來りました。

支那人のボーイが、都合五人居ましたが、昨十六日の夜から、今朝(六月十七日)にかけて、皆、逃去つて了つて、殘りしは、此の胡五と云ふ、五十位の忠實なる使丁一人であつた。彼れは、數年間一日の如く、領事館に在つて、實に、支那人としては

珍らしく正直に、忠實に仕へますゆゑ、濱子は、彼れに目を掛けて、使つて居たのでありますが、彼れは、亦、其の恩を知るがゆゑに、此の砲擊を受くる中にも、他のボーイの如く、逃出さないで領事館に働いて居ましたが、今、彼れが入來つて濱子夫人に、如何なることを云ふかは、此の次號を讀んで、知り給はんことを。

やれま籬（一）

唐扇

私は、明治十二年四月二十六日に、仙臺から三十里ばかり奥の、或片田舎に生れた。私を産むと、御母さんは病氣に罹られたので、實家へ戻つて療治された、それで、私も御母さんと一緒に、御祖母さんの許に居たが、その家は大野といふのである。

御母さんの病氣は、どんな病氣かといふに、脊骨が屈る病氣で、世間に數の無いものゝさうであつた。一月二月ならまだしもあらうが、それが、出入五年の間、其の御辛苦の程は想ひ遣られる。で、人は私を小山といふ、けれども、私は大野の者であると、人のいふのを眞にせず、稚心に、專らさう信じて居たのである。

御母さんの病氣は、初は、唯そればかりであつたが、段々骨が屈るに從つて、肺にさはりを起して、色着いた唾を吐く樣になられた。其の乳で育てゝは、子に病を遺すとて、醫者は、固く乳を禁じたので、張つて〳〵張り溢れる乳の頭へ、唐辛などを塗つて、漸く乳を離し、他には、一番菓子を喜んだとて、菓子で育てられたものだから、今も、かく菓子を好くさうである。そのかはり胃が弱くて。

容易ならぬ病であるから、初から、少との手落ちなく、百法療治されたけれども、病氣は、益々重るばかりで、一度は、醫者も匕を投げたさうである。けれども、死に度くないかと、聞くと、あゝ死にたくない〳〵、二人の子が大きく成つて、出世した樣を見るまでは、死に度くない、如何ぞ生して下さいと、床の上へ起直り、手を合せて拜まれたので、醫者も、其の氣骨に感じ、及ばぬ迄も手術を施した爲め、何日しか、其の效顯れて、快方に向ひ、全快されて歸られたのは、私の五歲の夏である。其のために、御母さんは、世にいふ傴僂、大分見憎い御身體になられた。

その頃の小山一家といふは、御祖父樣御夫婦と、もう一人の御祖母さんと、それに御母さんと、私等兄弟と、六人の家族であつた。私等が歸ると程もなく、御祖父さんは亡くなられた。

家人は、眞にそれ丈けで、私の家には、御父さんといふものが無いのである。あつたものか、無かつたものか、御父さんはなどいふ談話、一つ起つた事さへないのである。他へ遊に行くと、能く、御父さんは何地に被居の、御顏を見た事があるのと聞かれる。けれども、私には、何をいはれる事やら、殆んど解らぬ位で、何とも返事が出來ず、笑ひものにされる事が度々であつた。

思うてみると、成程をかしい。他の家には、御父さんといふものがある。けれども、私の家には無い。皆友は、御父さんといふものを持つて居る。けれども、私には無い。如何したものだらうと思つたので、或夜、御母さんの懷中で聞いた。私には、御父さんがないの、遊に行くと、人が聞くと。すると御母さんは、熟々私の顏を視て、誰がそんな事を聞くの、聞かれたら、唯存じませんとお言ひ

と仰せられた、で、御父さんはあるものか、ないものか、居るものか、居ないものか、譯が解らなく思つて、唯存じませんの外には、何とも答へる辭がなく、人に聞かれるのを、よく／＼不快に思つてをつた。

七歳の夏、小學校へ這入つた。其の學校といふは、其の地方小學校の分校で、家とは一番近いから、其所に入れられたものである。習ふ物も今とは違うが、一試驗過ぎると、私は、直ぐ上位を占めた。教師には、格別愛された方で、分校を終ると、本校へ移つたが、即ち、今の尋常二年生である。その本校といふのは、二三の町々を右に折れ、左へ曲つて、公園へ出て、それから、桑畑の長く續いた小淋しい路を通つて行く處で、半里以上は確にあるが、私は、遲刻する事が大嫌ひで、他人よりは、三十分も早く行つて居らねば、澄まぬ性質であつた。歸る時もその通り、他人は、公園あたりで遊んで居るけれども、私だけは、さつさと歸つて、學校の昇降に付ては、御母さんに、唯の一度も御心配を掛けた事はないのであつた。

尋常三年生の時である。或日、いつもの樣に、本を負ひ、辨當を提げて、歸途を急ぎ、公園を通つて、此方の町へ差懸つたが、後から、私の名を呼ぶ者がある。立ち止つて後を見ると、一人の女が門口に佇んで、手招して居る、私を呼ぶものとは思つたが、知らぬ人なので、行かうとすると、女は、小走に追着いて、袂を捕つた、私は、逃げんともせずに、顏を視て居ると、用事があるから一寸お出といふ。いはれる儘に戻ると、其の女の家へ入つた。連れられて座敷へ通ると、振舞の席と見えて、數多の人の寄り集つて居たが、申合せた樣に、一同私の顏を視た。その女の、此處へお座

りといふに委せて、一人の男の側へ座つて一禮した、すると、其の向に座つて居た人は、お丶善い子だ。大きくなつたこれはお前の御父さんだよと、側の男を指していふ。私は、日頃の心に比べては、格別何とも感じなかつた。これは、私の御父さんかと、唯さう思つたばかりである。お丶大きくなつた。巳は、お前の御父さんだよ。兄さんは壯健か、御母さんは無事でかと、私の頭を撫でて、父なる人は仰せられ、蒸菓子五個ばかりを、紙に包んで下さつたが、私は、何とも言葉が出ず、只、ぼんやりして居るばかりであつた。中々出來るさうな、此頃、知事から賞與が出たと、新聞にも書いてあると、座敷の人を見渡され、尚、私の頭を撫で丶、勉強して書物を讀んで、賢い者にお成りと仰せられたが、これで可いといはれたものか、菓子を懷中にして家を出た。頻りに、路を急いで家に歸ると、御母さんは、私の歸宅の遲いのに、座敷の端まで出て居られたが、其の膝へ取着いて、事の一伍一什を明けた、あ丶其時の御母さんの御心……、果してどんなであつたらう。

顰笑百話

與太生

(四)惡い者には斯の信切
可愛い者には彼の親切
あらマア左樣だッたのですか

ま丶ならぬ故に憂世とは申すなりと、さる博識の御話を、至極、御道理と承つたこともあつたに、その憂世の中でも、これ一つは信頼にあらうと思はれた、親子の間の、これはまだ、ま丶なるばかりに、憂きことのかぎりを盡すものもあるとか聞くは、ヤ、何としたことだらう。

可愛ざかりの御自分の御兒もあるのに、死なつた奥樣への義理で、彼の御寵愛は………。太郎さんも御仕合、旦那樣も御仕合、草葉のかげなる奥樣も、さぞ、御安堵で御座いませう。また、奥樣も御感心な、御年も弱いに………と、またと一人もあるまい樣に、家内の婢僕は申すに及ばず、おたり近所、知合縁者の誰彼まで、譽めぬ者とてもない位。いかさま、この後妻の、御氣のつかれることゝ云うたら一方では御座いませぬ。

身體がわるくなりますよと、寒い風にもあてなければ、暑い日影にも出しも爲ない。御菓子、これもかい彼もかい。坊は魚が嗜好、澤山あげませうね。やれ衣服それ玩具、何でも斯でも、坊の言ひなり次第。最早、學校へ三年も通うた時になッても、

さう。今日は休校。？御天氣がわるいから、それが宜でざんす。お隣の長さんも誘つて來て、家内で遊んで居なさい。

萬事につけて、斯樣な調子ですから、太郎さんは、我儘者の橫綱大關、その强情我慢は、誕生の釋迦よろしくで、天上天下唯我獨尊！。

あんな、むづかしい御兒を御愛育なさるは、と奥樣を氣の毒がるものもあれば、太郎サンを、惡らしい兒と、にらむものも出來た。ナニ、奥樣が御心よしだから持ッてるのサと、惡口する人さへあッたが、なか〳〵、御自分の御兒の次郎サンを嚴正しう敎育るのを見ては、御心よしどころか、どうして、立派な家庭の敎育家です。

間食と言ッては、漬物ひときれ食べさせませぬ。衣服なども、垢こそ付かないが、木綿物ばかり。いつぞや學校の復習を怠ッたとかで、二時間あまりの御小言があッた時、仲働の於何どんが、御

兄様とお較べ申しては、大變御勉强遊ばしますと、次郎サンのために御執成申したのを、お前だちの關係ことではないと、容易ならぬ御不興を蒙ッたこともある。落第ばかりして居る太郎サンの御清書は賞められることが有ッても、何時でも三番と下らぬ次郎サンの學校の成績は、遂ぞ、御譽にあづかッたこともない。世間では、御自分の御兒に、あんなに、つらく當りなさるも、先の奥様への義理であらうにと、たゞ〳〵、非常に、今の奥様を氣の毒がッてあります。

其の後、次郎サンが大學へ入學ッた年のこと、太郎サンは、某私立學校の學年試驗に落第して、遂々、學校生活を斷念めて仕舞ひました。それからといふものは、酒は飮む、玉突はする、父様に秘密で、母様が、軍資を供給してくれるのを好いことにして、したいまゝの放埓。世間では、彼の人ならと格別に不思議がらぬが、近親や父様は、今更の様にあきれはてゝ、廢嫡といふことにまで決定した春、其の心配からぢやといふことであッたが、父様は、急に病死られた。ア、惡かッたと、始めて氣がついて素行を改めやうとすると、幼少からの不養生が一時にあらはれて、同じ年の冬、胃病とやら胃癌とやらで、父様の跡を追ッかけて死去れました。そこでアハレある次郎サンは、思ひもかけず、數萬の遺産を相續した上に、學校の方も、首尾よく卒業して何學士、程なく海外留學生に撰拔される筈であるといふことです。

しかし、奥様は、それを嬉しいと思ふ風も見せない。たゞ、太郎サンのことばかりを、來る人ごとに悔しがッて話されるので、父様が死去ッた時から、此の家に寄食して居る奥様の最末の妹子が、不人情な様ですけれども、死去ッた方は、御壽

命ですもの、詮方が御座いませぬ。もし、あまり御嘆なさッて、それがために、身體でも惡うなさッては、

と、雨など降ッて物靜な晩、しみ〴〵と、慰める積で言ッたところが、後妻は、さびしげに、一寸、あざわらうて、

お前も、まだ御年がわかいのね。こんなことで、誰が正直に身體などを壞すものですか。それも是も、皆、次郎が可愛ばかりでさあね。毒をのませりやァ今時御醫者が承知すまいし、うち打擲すれば、松井さんの奥様の樣に、裁判所へなど引出されて恥かゝねばならずサ。ナァニ、毒をのませなくも、打擲しなくッても、甘く育てさへすれば、彼樣になッて仕舞ふのは明白ッて居るぢやァないか。

ヲーヤ、ヲヤ。あだ恐しい斯の御信切。もう斯樣な御話は止めませう。聞いてばかりも身の毛がよだちます。

或者いはく、かりそめならぬ親と子との間に、まゝ子まゝ親など、おそろしげなる名をつけ合うて、親からも子からも、互に隔てる故、世間でも、そんな間柄をば、まゝしい間ぢやからと、早合點をする樣になつたのである。如何な仇敵の末なりとも、親となり、子と呼ばるゝには、よく〳〵深い因緣あればこそ……。

それは兎に角として、この話も、まゝ親など要なきことを斷ッたから、忌々しげにも聞えるが、これ位の話で誰が身の毛をよだてるものか。毒殺よりも、虐待よりも、寧おそろしい此の甘う育てる信切で、現實、肉身の愛子を過またしむるもの、天下幾千萬の慈母、すべて然りである。豈に、ひとり、太郎サンの母樣に於いての

み懲からや。

と、マサカねえ。

雜報

紫雲靉靆

●●●●●神宮の御修理　皇大神宮御正殿の御修理工事は、目下、内宮々域内神樂殿の裏手なる假御造營所に於て、造神宮使廳より出張せる、牧野主事、木子技師、並に桐山、市川兩技手監督の下に、名古屋鐵砲町の岡谷惣助方より、撰拔し來れる熟練の職工を指揮して工事中なるが、神宮御屋根に要する金屬のことにしあれば、職工は、凡て淨衣潔齋の上業務に從ひ、其の鑄造に用ゆる火の如きも、總て檜の採火を用ゐ、地金の銅板は、消酸もて其の汚物を除去し、之に純金の鍍金をなしつゝあり。廿日より、千木、鰹木等の金物を剝ぎ、引續き、御棟木、御障泥等を取り、之を鍍金の銅板にて包み、本の如く仕組みまゐらする由にて、本月下旬竣成を告ぐべければ、御遷座式を奉仕するは、十二月十七日頃なるべしと承はる。因に、中川内務省參事官は、去月廿一日、兵庫縣より宇治山田町に來り、廿二日、神宮司廳、及び神部署の視察を終へて、内宮域内に參入、御工事中なる御正殿御屋根の御模樣を拜見したりとぞ。

●●●●●臺灣神社鎭座式　去月廿七日、臺灣神社の御鎭座式を行はせらる。その御模樣を記さんに、勅使宮地掌典御靈代を護し、馬車にて第一に進み、次に、妃殿下同じく馬車にて新道より進ませられ、午前八時社頭へ御着あるや、兒玉總督以下の參列

員は、一の鳥居前にて、勅使、及び妃殿下を迎へ、直に、嚴肅の式を以て、御鎭座の事を終りたるは、十一時四十三分なりき。當日は朝來曇天なりしに拘はらず、臺北より同神社に至るの間は、拜觀の人を以て充され、市内は、夫々の裝飾、並に奉納餘興あり。其の賑ひ未曾有と稱せり。但し、御靈代の儀仗は歩兵、妃殿下は、騎兵護衛し參らせたりとぞ。

●能久親王六週年祭　去月廿八日は、故北白川宮能久親王六週年祭に相當し、大國主尊、大巳貴尊、少名彦尊に併せて、能久親王を奉祀せる臺北劍潭山の臺灣神社にては、鎭座式に引續き、此の御命日を以て、勅使及同宮妃殿下參列の上、盛大なる祭典を擧行せるが、此の日、紀尾井町の御本邸に於ても、六週年祭を行はせられ、午前八時より、松平家務監督、以下家族の人々祭官を奉仕して、御靈前祭を行ひ、成久、恒久、輝久諸王殿下の御拜禮あり。同十時よりは、豐島岡御墓所に於て、御墓前祭を奉仕し、諸王殿下を始め、島津公爵、其の他御近親の人々、幷に長谷川近衞師團長、以下同師團將校兵士等參拜したりといふ。

●御陵御修理竣工奉告祭　京都神樂岡の麓なる、後一條院天皇菩提樹院陵は、本年四月御修理に着手し、此の程漸く竣工したるを以て、去月十九日午前十時三十分、勅使參向、竣工奉告祭を擧行されたりと。

◎鎌倉御滯在中の皇太子殿下　葉山御用邸より行啓あらせられ、目下、鎌倉御用邸御滯在中なる皇太子殿下は、毎日御出門あらせられ、海濱、或は、逗子近傍まで御運動遊ばせらるゝ由なるが、去月廿八日には、初聲村大字下宮田邊へ御運動中、目下、前田侯爵別邸御滯在中なる、有栖川宮殿下

の御遊獵遊さるゝ處に御會合相成り、夫れより御同伴にて、御遊獵あらせられ、同日午後四時四十分頃、御還啓あらせられたる由。

●東宮殿下の御避寒地　目下、鎌倉御用邸御滯在中なる東宮殿下には、一旦御歸京遊され、追て避寒のため、葉山、沼津兩御用邸の中に、行啓仰出ださるべく、多分は、沼津御用邸を仰出ださるべしと洩れ承りぬ。

●迪宮殿下大磯御滯在期　目下、大磯なる鍋島侯の別莊に、御滯在中なる迪宮殿下は、同地に於て、御越年あらせらるべき御豫定なるも、過般來、修繕中なる沼津の川村伯別莊、本月中旬頃には、悉皆竣工する筈なれば、或は、今年中に、同所に御移轉あらせらるゝやも知れずと云ふ。

●迪宮殿下の御玩具　迪宮裕仁親王殿下には、日增に御成長遊ばせられ、御養育掛主任川村伯夫

妻は、オシヤブリ、其の他種々の新式玩具を工風し、玉寶堂に命じて調製せしめ、去ぬる日殿下へ上りしが、右のオシヤブリは、象牙製にて、總長三寸五分、兩端即ち御口中に含ませ給ふべき部分は、長さ九分、最大直徑七分五厘の楕圓形とし、兩頂端を稍圓平ならしめ、御握の中央は五分にして、以下兩端に至るに隨ひ、直徑三分まで減ぜしものにて、右は、伯夫妻が侍醫等と共に、殿下の御手の力、及び、御口中の御發育等に適する樣、御安全と御慰みとを主として工風せしものなりとぞ。

●內親王殿下御避寒　高輪御殿なる常宮、周宮兩內親王殿下には、本月下旬より、佐々木御養育主任夫妻を從へさせられ、御避寒の爲め、小田原御用邸に御旅行あらせらるべく、又、麻布御用邸なる富美宮、泰宮兩內親王殿下には、來月早々、

林御養育主任夫妻其の他を從へさせられ、同樣鎌倉御用邸に成らせらるゝ由承りぬ。

●北白川宮妃殿下御上陸御摸樣　臺灣神社御鎭座式御拜の爲め、臺灣に赴かせられたる故北白川宮妃殿下には、去る廿四日午前十時、基隆御着、兒玉總督は、橫澤、大津兩秘書官を從へ、本艦迄奉迎、直に拜謁仰付られ、殿下には、艦中にて、數刻間御休憩、正午艦中に於て、兒玉總督、橫澤、大津兩秘書官、並に、隨行員一同に御陪食を賜り、午後二時御上陸、此の時、同港に在りたる軍艦須磨號より、二十一發の皇禮砲を發し、殿下には、兒玉總督の御先導に依り、同四時十三分、基隆停車場御發車、同五時三十分臺北に御安着、官民の奉迎非常に盛んにして、各國旗を掲げ、烟花を打ち揚げ、音樂を奏し、未曾有の盛況を極めたり。殿下には、間もなく、御旅館なる總督官舍に入らせられたりとぞ。

●北白川宮妃殿下の御下賜金と寄附　既に記載したる如く、故北白川宮妃富子殿下は、臺灣神社御參拜に際し、故能久親王と、臺灣との關係を思召され、田中家令を以て、同地慈善事業資金中へ、金五千圓御下賜あらせらるべき旨傳へしめられしかば、兒玉總督は、直ちに殿下に謁見し、親しく拜受して、難有き思召を拜謝せるが、德川公外數名は之に感激し、同じく慈善事業資金中に、多くの寄附をなしたりとぞ。

●久邇宮殿下の御祭典　故神宮祭主大勳位朝彦親王殿下は、二十四年十月薨去あらせられ、本年は、恰も其の御十年祭に相當するを以て、去月二十四日午前九時より、鳥居坂御別邸に於て、嚴かなる御靈殿祭あり。同宮家令小藤孝行齋主を、同家從鳥居小路經久、同河野通典、同武田健三祭官を

奉仕し、邦彦王同妃兩殿下にも、親しく御參拜あらせらるゝ由。

●沼津御學問所●●●●●　沼津御用邸にては、兼て、皇太子同妃兩殿下の爲、御庭內、南方廣濶の場所に、木造洋風の御學問所新築中なりしが、此の程、既に落成し、堤內匠頭の撿分を經て、目下內部の粧飾中なるが、整頓の上は、長崎調度局長撿分し、然る後、兩殿下の行啓を仰ぐ筈なりとぞ。

●赤阪御苑の菊●●●●●　新たなる品、めづらかなる色、年毎に錦を飾る大內山の菊の御園の、御有樣申すも畏こき次第ながら、こゝに、洩れ承はる所を記しまつれば、昨今、赤阪御苑內なる仙錦閣、衆芳亭、丸山口等の御花壇は、內匠寮の園丁、並に槖駝師十數名承はりて、菊花の植附に忙がはしく、本年は、菊の生育も最と穩やかに、恙かなく打過ぎたる折柄、この程の雨天勝ちにて、係りの司人等も窃かに心を傷めけるが、天候漸く順に復し、此の分にては、昨年に勝りて、美事の花をも着くるならんとの望みあり。花の盛りは、本月中旬頃にこそと申す。又、例年園丁等が、一しほ心を籠めて仕立まゐらする大造りは、一株千輪、乃至二千輪の花を着くるものにて、こたび衆芳亭、及び、仙錦閣の御邊りへ植附くべき、白、黃紅、其の他の大造り三株は、別けて美事の出來と承はりぬ。

●鴨獵被仰付●●●●　山口、米田、戶田、片岡、足立、川村、萬里小路、貴志、織田、伊集院、田島、岡崎、籔、松平等各主獵官は、二十日新濱御獵地に於て、鴨獵仰付られたるに付、同日午前四時、兩國より通運丸に搭じ、同六時新濱着、直に、御獵地に於て、狩獵を始めたるに、本年獵期に入り、初めての催ふしなりし爲め、獲物非常に多かりし由。

伊達主膳官は、北白川宮殿下を横濱に奉送したるに付、缺席したりと。

綾羅錦繡

●感ずべき衛生組合長　牛込區長延寺谷町六番地、同區長延寺谷町、及び、鷹匠町衛生組合會長千原榮次郎、同區鷹匠町九番地、同副會長加藤鶴吉は、是まで居民に便利を與へ、且つ、衛生事務に熱心盡力し來りし由なるが、一昨日も、鷹匠町九番地關庄造(二十七)が、腸窒扶斯に罹りしに、兩人は、自身に屆書を警察署に持行くやら、病院迄附添ひ行くやら、消毒にやりたる蒲團の更りを周旋する抔、最も親切に立廻るより、近隣にては、非常に感心し居れりといふ。

●修養塾の義擧　小石川區戸崎町一番地、修養塾々主吉丸一昌氏は、今般、學資缺乏して、研學に苦しめる學生を監督して、自活の途を計り、修學の目的を達せしめんが爲に、修養塾といふものを設立し、牛乳配達(一合四錢)を營ましめ、普く同情の士によりて、學資の缺乏を補ひ、其の目的を達せしめつゝあり。現に、哲學館、京北中學、日本法律學校、國民英學會に通學し居るもの數名ありと云ふ。

●地學協會の臺灣神社遙拜式と臨時總會　東京地學協會にては、先年、故北白川宮殿下を會長に仰ぎ奉りしに付き、去る廿七日、臺灣神社鎭座式擧行の當日、京橋區西紺屋町の同協會に於て、會員の遙拜式を擧行し、併せて、臨時總會、及講演會を開く由なるが、當日、先づ、午前九時より講演會を開き、左の諸氏出席、一般傍聽を許せり。

△湖沼學研究の現狀及實驗談　田中阿歌麿呂

△駿河國愛鷹山の麓に於ける所謂平氏敗走遺留品埋藏の塚に就て　理學博士　坪井正五郎

△隕石に就て　理學士　佐藤傳藏

右了て、午後一時より遙拜式を執行し、式後、理事花房義質男は、「東京地學協會創立の事情」を、海軍少將黑岡帶刀氏は、「臺灣談」を、故宮殿下が、近衞師團長御勤務中、殿下の副官たりし步兵少佐橋本三郎氏は、「故北白川宮御討伐當時の臺灣地理談を」各演說し、それより臨時總會に移り、評議員一名、幹事二名及、副會長の補欠選擧を行ひたりといふ。

●婦人共立育兒會總會

有栖川宮殿下を總裁に奉戴せる、婦人共立育兒會は、去月廿六日午後一時より、神田錦輝館に總會を開き、會頭鍋島侯爵夫人代理、弘田長氏の報告に續て、金子男爵は、總裁宮殿下の令旨を捧讀し、次に淸浦法相の祝詞朗讀あり。是にて式を了へ、伯知の講談、林中の長唄、高島、三宅等の狂言の餘興あり。薄暮散會したるが、來會者は、貴婦人令孃等百餘名にて盛會なりしと。

●紀念美術館

東宮御慶事紀念美術館は、上野の帝室博物館內に築造する筈にて、既に、地形に着手したるが、地層軟弱の爲め、更に補助工事を施すの必要を生じたれば、會長松田秀雄氏等は、實地調査を行ひたりとぞ。

●大石良雄二百年祭

九月二十日、京都府宇治郡山科村岩屋寺において、大石良雄二百年祭を執行したり。來賓は、高崎京都府知事、井上同警部長、藤本同參事官、竹下京都郵便電信局長、森大學書記官、西村京都商業會議所會頭、近郡各警察署長、府市會議員、各村長、新聞記者等都合二百餘名、席定まるや、祭式總代山本總兵衞、及、宇治郡長等、祭文を朗讀し終りて、知事以下、參拜者四十餘名の燒香、次に、山本總代の挨拶あ

り。夫より、東隣なる廣庭において、參拜者二百餘名の撮影をなし、午餐の饗應あり、此の間、越前永平寺住職森田悟由師、外三十餘名の僧侶は、義士肖像を陳列せる新築の彰烈堂、及本堂において、佛式の祭事を修し、なほ、餘興として　最後に、西山において、來賓に隨意松茸狩をなさしめ、また、廣庭内にて、六齋念佛、素人相撲、義太夫の催ありたり。當日、陳列したる赤穗義士に關する遺墨の重なるものは、大高源吾の歌、四十七士の印章、原儀左衞門の軸物、潮田又之丞、片岡源五衞門、原總右衞門、小野寺十内の書翰、大石良雄の辭世、進藤源四郎が、大石の山科隱棲地に居りし當時、庄屋、及村年寄に送りたる請書、其の他原の具足、大石の着せし袖丸堅縞の羽織、懐中兜、其の他槍、薙刀等四十餘品なり。又當日は、岩屋寺坂口に緑門を設け、庭園の中央に紅燈を吊す杯、非常の盛會なりしといふ。

●女子實業學校　今般、女子に必須なる學術技藝を教授し、專ら、婦德の養成を計るの目的を以て、本郷元町一丁目廿番地に設立し、其の筋の認可を經たる同校は、來十一月七日授業開始に付、本科、別科、專修科とも入學を許すと云ふ。因に記す、本科は、高等女學校程度を二ケ年に教授し了る、速成高等女學校なる由。

●支那人は千五百年前に米國を發見す　コロンブスの米國發見時代を距ること千餘年前に、支那人にして、北米に移住したるものありとのことは、種々の證左ありて、今日には、最早之を疑ふの餘地なき次第なるが、此の程、又中央亞米利加に於て、發見せられたる一佛寺の古跡は、明かに、千五百餘年を經たるものにして、建立の際、支那人宣教師の所管に屬し、其の後、千餘年を過ぎて、西班

牙人、コルテツ及びビッザロの輩、之を破壊したるものなりと云ふ。

●音樂的心臟を有する人　米國マサチユセット州スプリングフィールドの病院に、目下入院中なる一患者は、不思議なる心臟を有し、其の呼吸の都度、常に樂器の音を發すと云ふ。此の患者は、其の名を、ミルコオスキト呼ぶ露國人にして、久しき以前に、刄物にて、胸を刺されたることあり。此の時より心臟に異狀を生じたるなりとぞ。

●離れ難き吾家　巴里市ブーローヌ公園に近きブーローヌ街は、大厦高樓軒を列べて、孰れも、壯麗なる建築のみなるに、不思議にも、一の陋屋あり。主人は、七十餘歳の老媼にして、いと貧しき生活を爲せるにも拘はらず、曾て、米國の一富豪が、百六十萬圓にて、其の家を買受けんと申込みたるとき、一言の下に、之を拒絶したることあり。斯く貧しき生涯に、廿餘年前、ブーロヌ近傍の未だ寂寥なる郊野たりし頃、紙屑拾ひを業とせるもの、勤勉して貯蓄したる二三圓の金にて、之を買求めたるものにて、今の老媼は、其の人の孫なるが、貧しきが中にも、祖父の紀念物を棄つるに忍びず、庭園には花卉を植ゑ、常に來客を歡待して、閑生涯を樂しみ居るといふ。今の世には珍しき人といふべし。

●拇指と其人の神經　完全なる神經組織を有する人は、拇指を適宜に使用するも、神經に異狀ある人は全く、拇指を使用する能はずと云ふ。こは、多年英國の瘋癲病院に在りて、研究したる醫師の語りたる所にして、拇指を動かす能はざる人を見るときは、神經病者と認めて、大なる誤りなしといふ。

●女蠻の美麗なる服裝　クリーンランド土民の

女子は、倫敦、若しくは巴里の貴女よりも、高價なる服裝を爲し居り、時としては、其の價二萬圓に上るものあり。こは、海馬、或は、銀狐の皮等を纏ふためなり。又、英領コルムビアの土民中にも、黃金の環を以て裝飾となし、其の價千五百圓に上るもの多しと云ふ。

●永久燈火の發明●●●●● 佛國の一化學者は、曾て、偶然一の永久燈火を發明し、其の燈火は、現に、同國の博物館に保存せらるゝも、製法は、發明者自身にも、明かならざるため、再び之を造る能はずとの事なるが、米國シカゴのマツラチーと云ふ寫眞師は、此の程、一の永久燈火を發明したる由なり。此の燈火は、一種の化合物を玻璃製の球に入れ、化合物の溶解して、瓦斯の發するを待て、其の口を密閉したるものにして、其の瓦斯は、強き光を發して、永久消滅することなく、球は、持運びに自在なりと云ふ。

●米國人の平均生活●●●●● エヴエリーボデース雜誌の報ずる所に據れば、米國內に於いて消使せらるる食料を人口に、割當て平均するときは、一人一年の消消額は、麥粉一千二百五拾斤雜穀六十斤、肉類七百五十斤(一日凡そ二斤)馬鈴薯七百五十斤、バタ百斤、砂糖三百斤等にして、此の他、一週間に珈琲一斤、一個月に、茶十六弗を要する割合なり。而して、斯の如き食事は、英國に在りては、富者に非ざれば、爲し能はざる所なりといふ。

●印度の飢民數●●●●● 九月九日の調査に據れば、印度に於て、現に政府の救助を稟け居る飢民の數は、四十五萬三千人なりしと云ふ。

●幼兒と入浴の害●●●●● ヘルス雜誌は、一醫家の說なりとて報じて曰く、幼兒は、生れて一個月を經るまでは、入浴せしむべからず。幼兒の體を洗

ふには、常に小局部に止め、浴ひたる後は、速に、其の局部を拭ひて、少しも濕氣の無き様にすべし。又、幼兒の體は、常に毛布にて包むを宜しとすと。

●スマトラの奇なる風習　スマトラにて、夫死するときは、妻は、吾家の門側に幟を立て、其の幟の、風に依りて裂けざる間は、如何程長き間にても、貞節を守りて、結婚せざる風習あり。但し、少しにても、幟に裂け目を生ずるときは、其の瞬間より、公然結婚することを得。眞先に其の家に入りたる者は、如何なる男にても、直ちに、夫と定めらるなりと云ふ。

●米國の婦人石油會社　米國テキサス州のオースチンに、ヤンクレヂイス、オイル、コムパニイと稱する石油會社あり。株主は、悉皆、妙齢の婦人より成り、會社の業務も、盡く婦人に依りて扱はれ、社長は、ヘツド孃と稱し、速記を業とした る人なりと云ふ。

●高貴婦人の健足者　山野を跋渉し、健足を以て稱せらるゝ婦人中、王族なる人少なからず、伊太利のマーゲリタ太后は、其の一なり。常に、輕裝を爲して、登山することを好まれ、普通の人も、容易に登られざること屢なりと云ふ。伊太利王后ヘレーヌも、亦、其の一人にして、幼時モンテネグロに住せられたる頃より、遠足を好まれ、又、遊獵をも好ませらるゝ由なり。

●食物不消化と芭蕉の實　胃病中、食物不消化は、殊に、難治の病症なるが、此の事に關し、倫敦の一新聞の記事は、興味あるものなり。同新聞は曰く、神經的食物不消化病にて、久しく惱み居たる一婦人は、如何なる醫士の療法も、何等の效なく、身體は益衰弱するのみなるより、最早、快復の望なからんと、殆んど斷念したるが、或人

の勸告にて、一醫士の診斷を稟けたるに、其の醫士は、何等の醫藥を與へず、バナヽ（甘蕉俗に芭蕉の實と云ふ）のみを食とし、他に、一切の食物を斷つべしと告げたり。婦人は、最初に、其の療法を怪しみたるも、數日間、此の食物のみを經驗したるに、次第に氣分の勝るゝより、漸く、此の療法を信じて、種々なる仕方に料理して、常食としたるに、終に、全く健康體に復し、今は、此の療法を知人に勸告し居れり。バナヽは、澱粉を含み、熟せざるときは、不消化なれども、熟したるものは、種々の效能あり。近來、果實療法は、益、盛んに行はれんとするが如し。云々と。

英國婦人教育家ヒユース孃を問ふ

記者、一日友人なるパーマー孃の懇切なる紹介に依りて、目下、我邦來遊中のヒユース孃を某官衙に招待し、婦人教育に關する數多の質問を試みたる末、同官衙に設けある外國游學生徒の爲めに、一場の演説を請ひたるに、孃は快く承諾し、左に記するは、則ち其の大意なり、或は、多少、記者の聽き違へたる點あるを保すべからず。其の責唯々記者に在り。

私は、海山萬里を越えて、遠く、貴國へ參り、他鄕の客となり居る中にも、何となく、本國に居るやうな感じを有ちまして、他國に在るとは思ひませぬ。必竟するに、貴國と我が英國とは、孰れも島國であつて、其の地勢の上に於いて、酷似した所があり、且又、貴國人は、上、紳士貴婦人より、下は其の日暮らしの下等勞働者に至るまで、皆、鄭寧懇切でありまして、何處に行きても、親愛の情を以て、迎へて呉れるからであります。亦貴國人の極めて勤勉なると。美術の發達して居りまするとは、私の心を動かした一つであります。貴國の學生は、我が英國の學生よりも、短き期間內に於て、多くの學科を修めて居ります。美術の

發達して居りますることに就きましては、私は、來遊以來、鎌倉等に參りまして、古蹟、及び、遺物等を一覽し、其の精巧あるに驚きました。概して、貴國人は、美術の觀念に富んで居りまして、一寸とした物にまでも、其れ〳〵の意匠を寓して居ります。私は、此の頃、或店より、形付き手拭五十筋を買求めました。是には、皆さんも、定めし怪まるゝでありましうが、私は、之を本國の友達に贈りまして、貴國人は、此の如き廉價なる品物にまでも、其れ〳〵の意匠を寓して在ると云ふことを、示したいと思ふのであります。

兎に角、貴國は、此の三十年來、各種の方面に於きまして、長足の進歩を爲し、最高文明國の群に仲間入りすることになりましたが、私の觀る所に依りますれば、或は失禮かも存じませんが、未だ一つの缺點（ブラック、スポット）があると思ひます。既に、最高文明國の仲間入りを致しましたに就ては、亦、文明國たる條件の總てを備ふべきことは、當然であります。故に、一日も早く、此の缺點を拭ひ去ることは、貴國人の責務であると思ふのであります。私の缺點と思いますることは、何であるかと云ふに、貴國に於ける婦人教育の、未だ進歩せぬことであります。此の事は、貴國の最高文明國として、是非共、具備せなければならぬ條件の一として、速に、此の缺點を補充せなければならぬのであります。併し、何れの文明國に於ても、婦人の教育は、常に、多少男子の教育よりも、遲れて居りますることは事實であります。歐米の各國に就きて、比較して見ますれば、男女教育の差、最も少ないのは、亞米利加、及び英吉利であります。獨逸に行きますると、其の差は餘程大きく、更に、露西亞に於きましては、一層甚

しくなるのであります。元來、一國文明の進歩と云ひますることは、尚、一隊一團の人々の歩行と同一のものでありまして、一隊一團の人々の中、最も足の弱き人の歩調を基として、全隊全團の歩調を定めなければなりませぬ。若し、足の弱い人を後に殘し去り、足の早き人々のみ、勝手に前方に進行します場合には、最早、一隊一團としての進行ではありませぬ。一國の進歩も、矢張、是と同じ理由でありまして、婦人を後に殘し、男子のみ進行すると云ふことは、一國としての文明進歩の理法でありませぬ。是非共、男女の兩性は、相伴ふて進行せなければならぬのであります。左ればと言ふて、男子が、時々後方を顧みて、强て女子の手を牽くと云ふことは、女子に取りては、不面目の事でありますから、婦人に對しては、男子と同等の敎育を受くることの出來るように、十分の便宜と、機會とを與ふることが、最も、必要の事であると思ひます。

元來、婦人敎育と云ふことは、ひとり婦人の爲のみでなく、實は、男子の爲にすることは、多いのであります。乃ち、婦人を敎育して、其の智識見解を高尚ならしむることは、賢良なる母を作り、妻を作り、併せて亦、和樂する家庭を作る爲めであります。若し、男子にして、無敎育の母を有ちまする場合には、學校に於て與へられたる敎育の過半は、打ち壞さるゝやうな結果を生じ、無敎育の妻を有ちまする場合には、偉大なる、又は、進取的の事業に着手することが出來ませぬ。亦、家庭整理と云ふことも、到底、男の手に仕了ふせるものではありませぬ。是非共、婦人の手を借らなければならぬのであります。以上の事は、婦人敎育の必要なる一二例を擧げましたのみで、此の他

の必要ある理由を、詳しく述べますれば、限りある時間内に、述べ盡してことの出來ぬ程であります。貴國の婦人は、温順にして、教育を與ふるには、此の上なく適當して居ります。賢良なる母となり、良淑なる妻となるには、極めて、適當なる素質を備へて居りますから、更に、一層の教育を與ふるに於ては、文明國としての貴國の體面は、毫も缺くる所はありませぬ。のみならず、國運の進歩も、滯りなく行はるゝと云ふことは、私の確信して疑はぬ所であります。

日月會作品の評

一記者

年どし春秋の二期に渡りて、美術展覽會の催さるゝ事、數あれども、分けて、今年の秋ほど、面白く感ずることは稀れなるべし。先づ、數ふれば、博物館前なる五號館に於ては、南館に、美術院派の急激なる改良畫會あり。其れに隣りて、日月會の、着實なる改良派あり。北館は、裸躰美人の、風教上害ありとまで認められたる、西洋まゝなるハイカラ流派あり。又、摺鉢山の前なる協會にては、彫工會とて、刻りものゝみを集めたる會もあり。此の會の終るを待ちて、來月に入り、繪畫の大會ある由、豫告さへある程なれば、時ならぬ花は、一時に東臺の下に開く事と、前途を樂しみつゝ、歩は、何時のほどにか、竹の臺に運ばれたり。翩々たる數流の旗と其の外、パノラマめきたる白馬會の入口には、蒙古の襲來かと、怪しまるゝ程の飾りに、先づ、眼を奪はれ、右に、勇ましき小國民の運動會を見、滿腔の愛情を表しつゝ、左に、日月會の入口に來れり。此の會は、繪畫に限らず、東西の別もなく、彫刻さへも混じて、趣味多かるべしと思へば、先づ、此の會より見る事とせり。

場に入りて、吾等素人は、兎角に、麗しきものゝみに、眼は引かさるゝなれども、專門家より言はすれば、反て、淡泊なる墨氣の内、密畫に優さるの個處あることを聞けば、他日の話の種をも得んと見渡せば、淡彩の遊魚、極彩の武者、水墨の山水、意匠の面白き、筆勢の雄健なる、立按の斬新なる、思想の沈着なる、各筆者の意思は、紙上に躍如として現はれ、何れを善とし、何れを非とする事、中々に六ヶ數けれども、先づ、良きものかと思はるゝものを、一二點を書きしるす事と定めたり。入りて、直ぐ向ひに當り、

（夕風の圖）　京都出品（木島櫻谷筆）にて、二人の美女、夕風に吹かれつゝ立ちたる圖あり。近よりて見るに、頭髮は、享保以後かとも見らるゝ結び方、いと優しき姿して、朝顔を

見、手に團扇を持てり。此の筆者は、京都の今尾景年伯の高弟にて、今は、彼地にて賣出しの人の由。着色の美麗と、容貌の彩色法は、誠に、實物かと思はるゝまでに巧みにして、上出來なり。只、慾には、今少しく、體格に注意を乞ひたき處あり。顔の大きさに比し、躰瘦せ勝ちに思はるゝの感あり。之れに隣りて、

(秋の野)　東京(坂谷耕漁筆)の圖あり。此の人は月耕門下の俊才にして、特に、能狂言等の畫は、獨歩なる由。此の圖は、筆者の不得意なる題なるべきに、一羽の鳥を中心とし、之れに、野薔薇、かるかや、雜草等をあしらひ、野中の情、よく現はれたり。此の人の作にて、ツリ狐の圖、別にあり。之れは、常に比し、稍疎畫なれば、得意なる作の樣にも見へず。之れとならびて、

(立雛の圖)　京都(海外天年筆)あり。之れは、誠に美麗にして、無難の出來なり。天年氏は、博覽會にて、雛の圖にて、評判を取りたる事さへある人なれば、出來良きも、無理ならず。此の人は、考按圖に巧みにして、友染模樣等に至りては、殆んど、獨歩の妙あり。着したる模樣鑑等は、標本として、世に珍重せらる。此の側にて、

(春秋艸花)　二幅對　(酒井唯一筆)あり。此の畫は、普通の艸花の畫法と、異なりたる處あり。之れは、光琳抱一派に屬するものにて、一種の畫法なり。吾等の眼には、模樣畫の樣には思はるれども、此の種々の畫趣は、反て、佛國等にて、今、珍重さるゝと云ふ事を聞けり。凡俗の解し能はざる處に、氣韻の高き高尚なる處あり。

(吉祥天女)　(芝千秋筆)は、見事の彩色にて、金泥の圓光、配色の心勞等、察するに餘りあり。遺憾乍ら、少しく美麗に過ぎたるの嫌あり。之れに隣りて、

(江亭觀月)　(野村文擧筆)老熟の筆。巧に、淡彩と、水墨とを調和し、温雅なる風光、誠に上々の出來なり。稍、圖樣の古きの感あるも、奇を好んで、癖に陷るに優れり。之れに次て、

(竹取の翁)　京都(梅村景山筆)翁の顔に、無量の悦ひを含み、林間の光明は、かくや姫を照し、まことによくできたりされど、此の圖は、景山氏の新意匠なるべく、畫法も、又、平素に比し、稍、遊態ある樣に見受けたり。同氏の出品は、反て後ちの平等院の方、大に優れるが如く感ぜり。こは、我れ一人の觀なるまじくと考ふなり。

先つ、之れにて、最初の一室を見終り、第二室に入れり。爰は、名に高き人々の作品夥し。左の方には、

(松に旭)　京都(望月玉泉筆)あり。氏は、京都の名家、玉川氏の後を襲ひたる人。熟練の筆、評するは、反て禮を失ふを恐る。之に鄰りて、

(秋晴)　京都(鈴木松年筆)あり。氏は、京都に於ける雅邦とさへ呼ばるゝ人にして、夙に、健筆を以て名あり。此

の鷲の圖は、實に、氏の傑作なるべし。樹上、猝かに鳥王の度量を示し、眼光はするどく、千里の外を見とうすかと怪しまるゝまで、誠に、傑作と見ゆ。同じ筆にて、鯛の圖、大福なる圖樣あれども、之れは、海中に詳しき人の說には、遊泳せるさまの、少しく、實際と異なりたる處ありとの評さへあれとも、兎に角、大家の健筆、塲中比類なき樣見へたり。
之れに隣りて、

（蓬萊の圖）　（川端玉章筆）あり。不相變達者なる腕前、旣に、妙感に逢せし作なれば、世論は、只、感服の外なし。

（盆踊）　京都（田中一華筆）の二幅對あり。二幅ともに上出來なるべし。されども、我等の眼には、右の方面白ろく見ゆ輕く、舞たるさまと、筆勢着色ともに、澁滯の跡なく、手氣麗なり。

總て、此の側には、良き畫のみ集め、陳列されたるが如く、惡しきものも無く、取り分け、奥田秋石の瀑布の圖、見事に、直ぐ其の次に、

（紅葉　美人）　靜方筆
（櫻　美人）　輝方筆

の二幅對は、何れも良き出來にして、鳥渡俗受よく、慾には、今少しくしまりたる處ほしき樣なり。或る老人の說には、頭の結び方さ着物の摸樣と、時代合はざる由、評されたり。此の頃の贅澤者は、總て裝す摸樣は、下の方につけ、反て、其の裏に、手を盡したる染摸樣、縫摸樣を附する筈の由なれど、畫としては、上部を美麗に飾ざるの必要もあるべく、無據次第と云ふべし。之れに並びて、田中一華筆の長夜の圖、面白く、根本雪蓬氏の孔雀の屛風等、見事にして、何れも見劣りなく、次の席へとは入れり。

こゝには、尙、日本畫の優等なる圖、夥く、巖島紅石の芭蕉に、狗兒愛すべく、大山東皐氏の猫兒は、例に依て御得意の筆氣、麗なり。此のつぎ當りに、

（寒風）　（小林吳嶠）筆の群鳥あり。題意の如く、誠に、寒むく降りしきる雪の、白くは見ねで、淡黑く見ゆる處など巧と云ふべく、又、同氏は、花鳥の妙を極めたる事とて、六ヶしき圖樣を、何んの苦もなく、各鳥の精神を現はしたる、感ずるばかりなり。

之れより、第二類の西洋畫室に入れり。西洋畫には、水彩畫と油畫の二種あり。鳥渡見たる處にては、解らざるも、近よりて見れが、油畫は、繪具に艷あり。光澤あるも、描き憎くき事とも思はるれど、水彩畫は、稍、日本畫に近かく、手氣麗に見ゆ。英國などにては、反て、水彩畫の流行ある由。我等日本人は、水彩畫の方心地よく見ゆ。先つ塲中目につくものは、

（綠　蔭）水彩　石川欽一郎筆
（舺　橋）同　同　筆

の二圖、殊の外、面白しく感じたり。之れに隣りて、

（殘　雪）水彩　大下藤次郎氏筆

（春）　同　同

の二圖、共に巨く、殘雪の方は、西洋人好みに適すべく、春の方は、日本人の悦ぶ圖なり。二ツの內、我は、春の圖を採れり。靄々たる間、たなびくが如し、遠く、櫻花を望み、江邊二羽の鷺、のどかに遊べる樣、恰かも、宋時代の唐ら畫を、見るが如き想ひあり。

（平潟港）油畫　平木政次筆

（白糸の瀧）同　同

二圖、共に精巧を極めたる圖なり。殊に、平潟港の圖は、實際に見るが如く、色の調和、位置、配合、申分なし。

（芥子の花）水彩　五姓田芳柳筆

（富士の圖）同　同

花、其ものゝ情を寫し、美麗なる水彩畫なり。同氏は、有名なる五姓田氏の後を襲ひたる人、誠に、申分なき出來なり。

（秋の末）　河久保正名筆

（銚子の圖）　同

同氏は勉强家なる一人にして、廿枚の出品、作品あり。中につき、秋の末、最もよく、銚子の圖、之れに次げり。此を見終りて、隣室に入れば、若干西洋畫家の一團體にて、水彩、油畫、取混ぜ、三十枚を越へたり。石井滿吉氏の大阪城、磯部氏、藤高氏の景色抔面白ろく、見受けたり。

隣室は、女流日本畫家の出品なれば、殊に、面白ろく、感じたり。其出品中、見事なる出來は、左の諸氏とす。

（羽　衣）　金子秋紅女史

（花　鳥）　小坂淸子女史

（瀑　布）　馬杉靑寧女史

（香　魚）　前田玉英女史

（鷄）　小宮東溪女史

（鶴）　稻村香溪女史

（月　夜）　六人部暉峰女史

（小松引）　伊藤古仙女史

右は、何れも丹靑を盡されたる苦心のほど見へ、敢て、男子に讓らざる腕前なり。殊に、小坂淸子女史は、故小坂象堂畫伯の未亡人にして、つとに閨媛の間こへ高き人なり。今は、良人の後ちを守もり、せめては、畫道に入りて、故人をなぐさめばやとて、勤めの餘暇、筆を運ばれ、進歩著じるしく、此の作品は、品川の原氏の邸にて、畫きたる由なり。

此の室を出づれば、再、日本畫に移り、竹內薰風、山田松蹊等の諸氏、小山榮達、前波鶴年等の、作品夥だしく、一々評するの勇氣もつきたれば、再、參會を約して、白馬會、及、共進會を見ばやとて、歩を急がして、隣館に入れり。

落葉籠につきて

本號は、さまぐ＼なる記事、輻輳したれば、いと口惜しき次第なれども、已むを得ず休載することとなしぬ。されば、次號には、其の代りとして、はなぐ＼しくなさむつもりなれば、續々稿をよせられむことを望む。

題字と口繪につきて

題字は、吉田松蔭先生の筆蹟にして、先生の功業の大なるは、人々の、普く知り給ふ所なれば、茲に贅言を要せじ。このたび、特に諸媛のために、さる所の秘藏に係るを請ひえて揭げたる者なり。また、鄭領事、及び、濱子夫人の肖像は、樂園欄にて、物しつゝある記事にてらし見ば、其のいさはしの高く、其の苦心のほども思ひたられて、感慨やみがたからむ。鄭領事の風采、泰然として山の如く、濱子夫人の淑正なるがうちに、毅然として動かすべからざる者あり。あはれ諸孃よ、これを活きたる模範として、益、勉めはげみ給へかし。なは、天津日本領事館の口繪を參照せられなば、當時のこと、目の前にあるが如からむ。次の鉛筆畫は、華族女學校生徒の物せられたるものにて、よくその眞境を寫しえて、えもいはれぬ妙趣あり。いともく＼、巧にして、感服の外なし。



●新刊寄書

偕行社記事	第二百七十四、五、六號	東京	偕行社
兒童研究	第五、六號	東京	教育研究所
東京經濟雜誌	第千九十八、九、千百一、二、三、四、號	東京	經濟社
大阪商業會議所月報	第百二、三、四號	東京	商業會議所
日本人	第百四十六、七、八號	東京	政教社
兵事雜誌	第十八、九、廿號	東京	兵事雜誌社
教育公報	第二百五十一、二號	東京	帝國教育會
宮城教育雜誌	第七十三、號	仙臺	宮城教育會
信濃教育雜誌	第二百號	信濃	信濃教育會
風調	第四號	島根	風調社
越佐教育雜誌	第百三、四、五、號	新潟	越佐教育會
埼玉教育雜誌	第百三十二、三號	埼玉	埼玉教育會
島根教育雜誌	第百七十七、八號	島根	島根教育會
大日本山林會報	第二百三十五號	東京	大日本山林會
東京教育雜誌	第百四十一、二、號	東京	東京教育會
大分縣教育雜誌	第百九十九號	大分	大分教育會
日本弘道叢記	第百十三、四號	東京	日本弘道會
下野教育	第百七十七號	栃木	下野教育會
東京市教育時報	第十三號	東京	東京市教育會
愛媛教育雜誌	第百六十九、七十號	愛媛	愛媛教育會
愛知教育雜誌	第百七十四號	愛知	愛知教育會
山形教育雜誌	第百二十七、八、九、號	山形	山形教育社
上野教育雜誌	第百六十七、八號	群馬	上野教育會
鹿兒島縣教育雜誌	第九十三、四、五號	鹿兒島	鹿兒島教育會
大阪教育會報	第百八十三號	大阪	大阪教育會

紀伊教育	第百二號	和歌山	和歌山教育會
明義	第十號	東京	明義社
教育	第二十號	東京	茗溪會
法政新誌	第五十號	東京	法政學會
千葉教育雜誌	第百十四、五號	千葉	千葉教育會
神道新誌	第六十六號	東京	神道新誌社
高知教育	第百十二號	高知	高知教育會
長崎教育雜誌	第二百號	長崎	長崎教育會
日本濟美會雜誌	第六、七號	東京	日本濟美會
日洲教育雜誌	第二十八、九號	宮崎	日洲教育會
東京感化院月報	第五號	東京	感化院
京都教育雜誌	第百十三號	京都	京都教育會
女子のとも	第百、一、二、號	東京	東洋社
少年世界	第十三、四、五號	東京	博文館
心の華	第十號	東京	大日本歌學會
令德	第八號	東京	令德會本部
國學院雜誌	第九、十號	東京	國學院
日本婦人	第廿二、三號	東京	帝國婦人協會
なんな	第九、十號	東京	大日本女學會
大日本婦人教育會雜誌	第百七、八號	東京	大日本婦人教育會
大八洲雜誌	第百八十四號	東京	大八洲學會
姫百合	第三號	東京	姫百合社
ほつま	第二十號	備中	金光中學秀眞會
婦人世界	第五號	大阪	浪華婦人會
大福帳	第一、二號	名古屋	山田丹心館
愛國	第八十號	東京	愛國社
監獄協會雜誌	第九號	東京	監獄協會
廿世紀	第六號	東京	二十世紀編輯部

女鑑歌文月次兼題

十一月廿日分

歌　初冬

文　故郷の父母に送る文

右十一月九日〆切

十二月五日分

歌　雪

文　燈下の讀書

右十一月廿四日〆切

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題　住所　姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○總て書式に違ひたるは沒書とす。

○女子は、なに人にても、隨意に投稿するを得。

○天地人を取りし人には賞品を呈す。

●一大歌書豫約出版廣告●

（國學院藏版）

故北村季吟著

八代集抄

附錄 校訂増補 五十音引 勅撰作部類全一冊

原本五十卷縮 洋綴全二冊 正價金參圓五拾錢

豫約價 甲金貳圓 乙金貳圓貳拾錢

原本五十卷古今集以下新古今に至る八代の勅撰和歌集を註釋したるものなり其の解の簡にして要を得たるは古來その比を見ずされば和歌を學ばんとするものはまづ此の書によりて研究するを常とす今や文運の隆盛に伴ひ本書の需用頗る多しと雖も舊版の存するもの甚だ稀に殊に浩瀚にして代價も高貴なるがために往々にして學界の進路を妨げんとす是れ弊舗が國學院に請ひて此の書を刊行する所以なり

別冊附錄としたる作者部類（正續六册寫本）新葉集作者部類（一册寫本）は今古集以下二十一代集の作者官位世系歌數等を擧げ帝王親王大臣より僧女神明佛陀等に分類したるものにて歌人の傳記を見るには此の書の上なし世人が珍として貴重するも故なきにあらず殊に井上賴圀翁の所藏なる五十音引の本を原書として更に數本を對校增補したれば讀者の便益鮮少ならざるべきを信ず

｛豫約方法手續｝

製本體裁	本書は四六版洋裝本綴上下貳冊大凡貳千二百頁
豫約期限	豫約募集期限は本年十一月廿日迄とす但し豫約の御申込あるも期日までに豫約金御拂込なき時は御破約と見做す又期日後は正價金三圓五十錢に復す
代金拂込	豫約金拂込の方法は甲乙の二種とす（甲）は十一月廿日まで全額金二圓拂込（乙）は十一月廿日に金一圓十二月廿日迄に金一圓二十錢を拂込ものとす但し東京市内豫約者には集金人を差出すべし
製本時期	製本出來豫定期日は本年十二月二十日として同日より拂込順序によりて配本すべし
官廳學校	諸官廳及び官公立學校は豫約前金に及ばず其の旨を記し署名捺印して送附せらるべし但し豫約代價は金貳圓貳拾錢の事
送本料	東京市外は豫約價の外に送本料申受くべし 小包郵送料 十里内七錢 百里内十二錢 百里外二十四錢 臺灣四十八錢
見本進呈	見本入用の方は御申越次第進呈すべし但し照會の件は必返信用郵券を添へらるべし

發行所豫約申込所 東京市日本橋區通三丁目 六合館

豫約申込所 東京市京橋區南傳馬町一丁目 吉川半七

女鑑

明治三十四年十一月五日發行

毎月二回五日廿日發行
第貳百四拾號

明治廿五年三月十二日
第三種郵便物認可